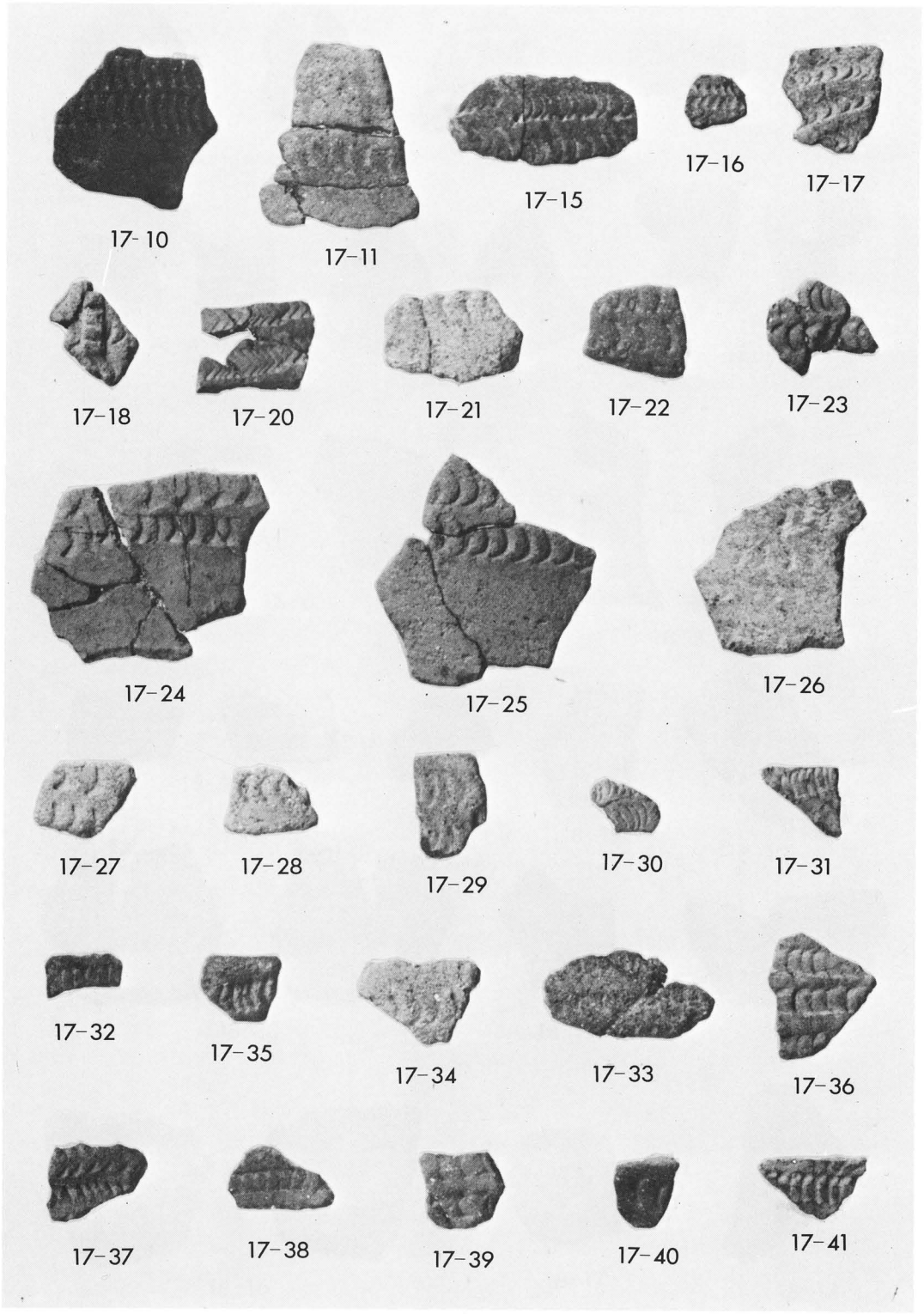
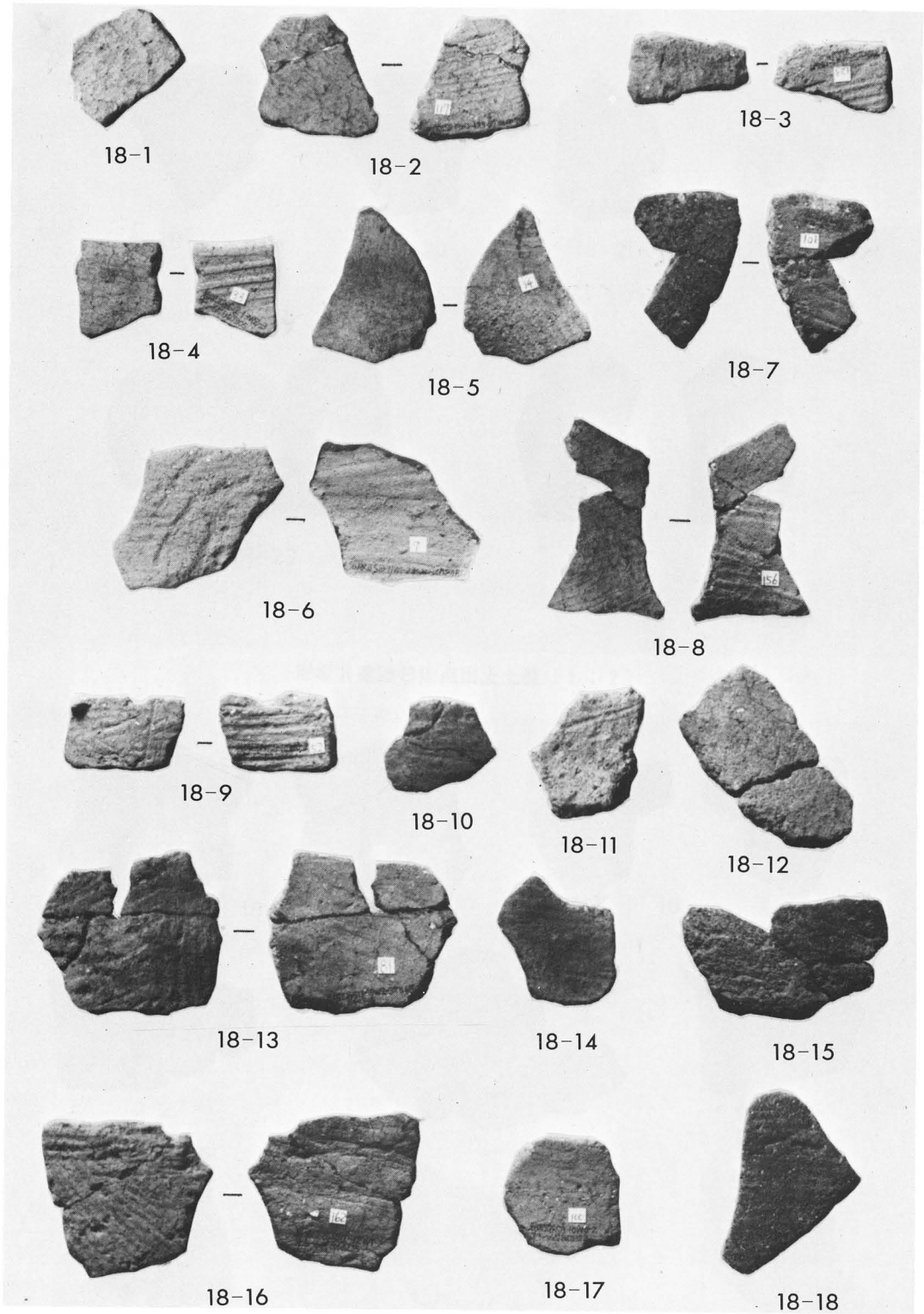
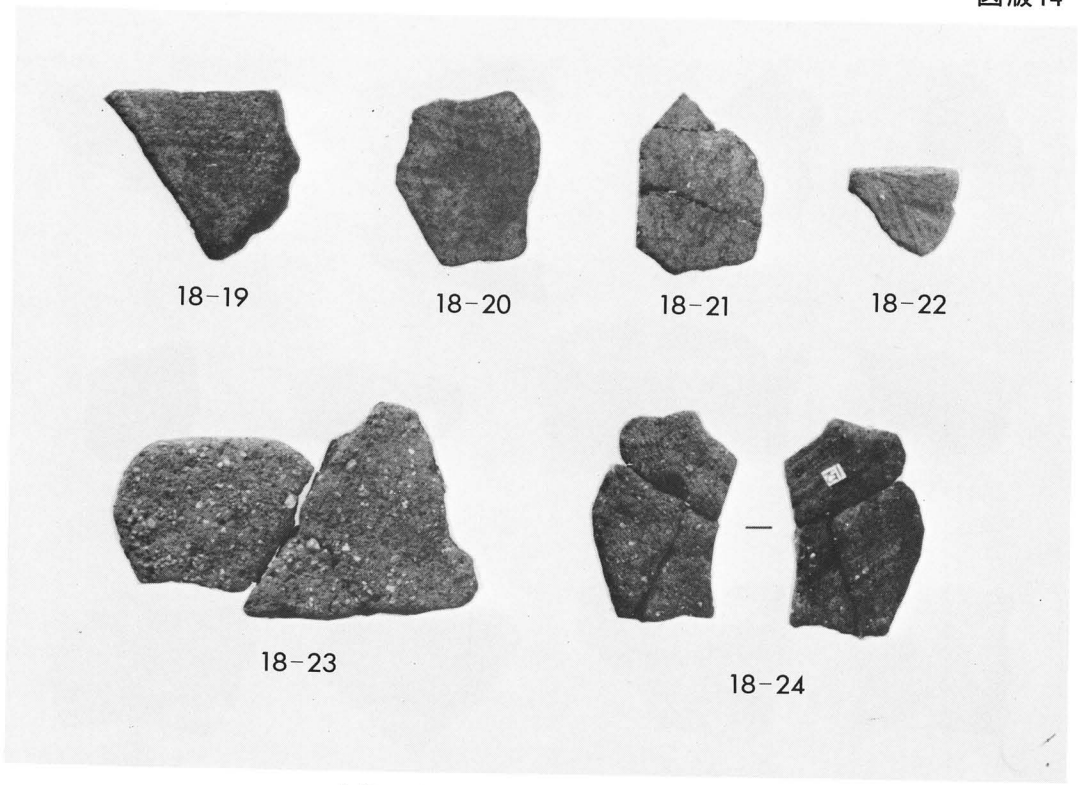


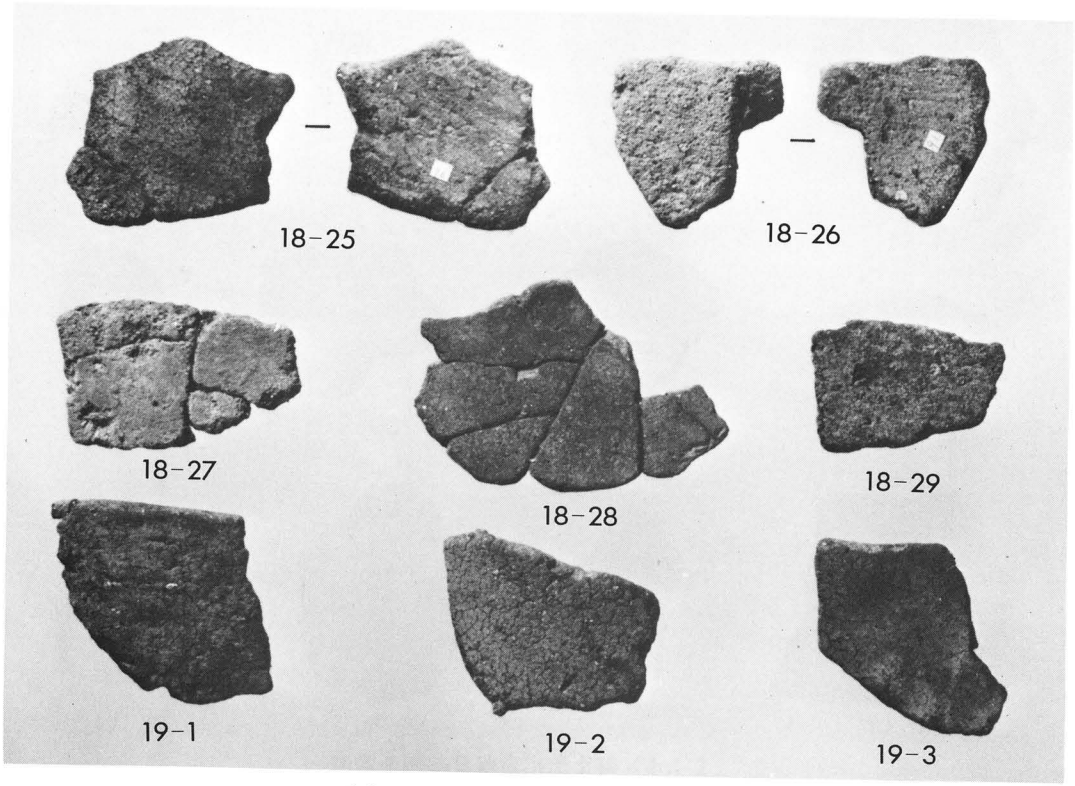
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土土器（1 ： 2）



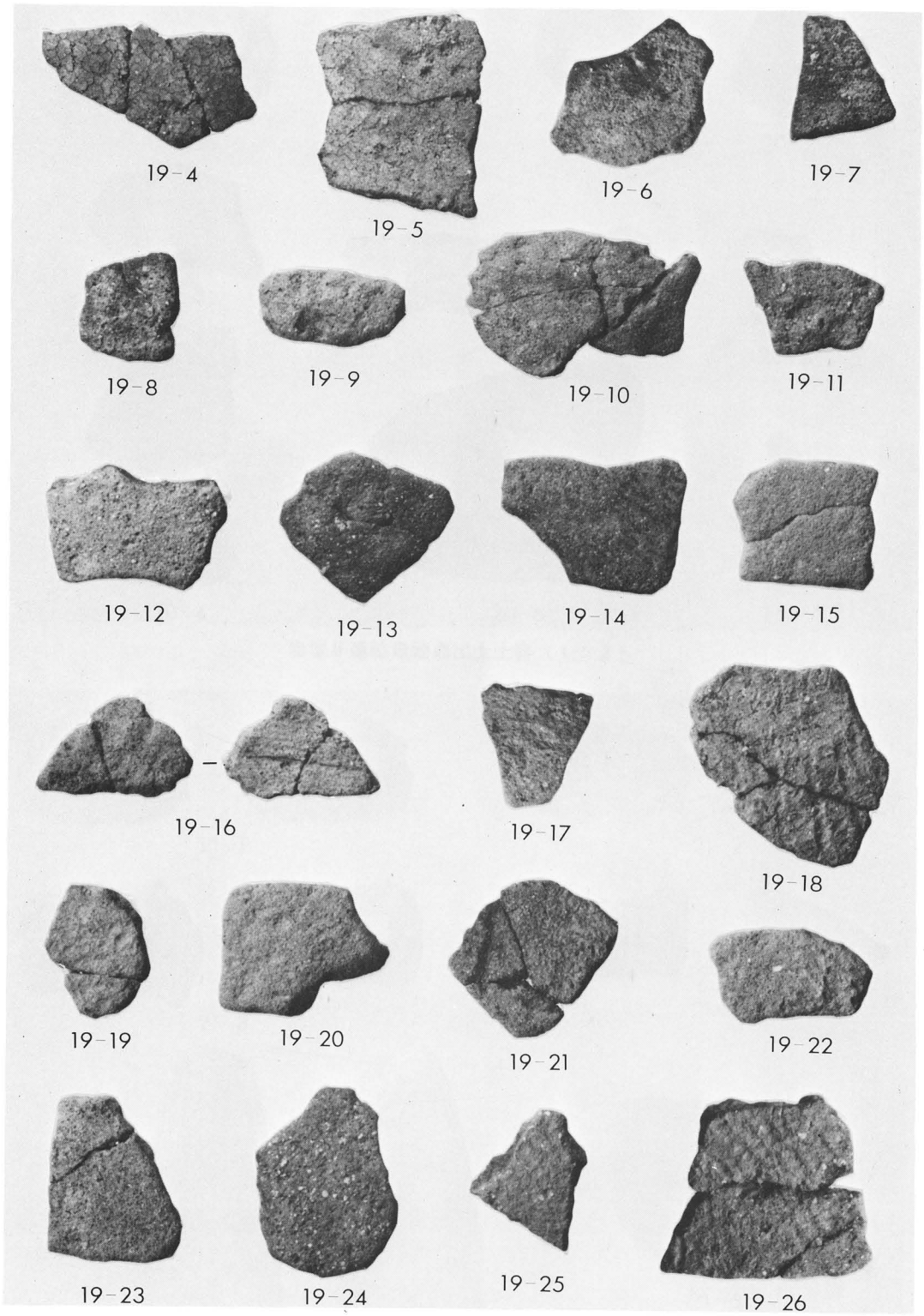
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土土器（1：2）



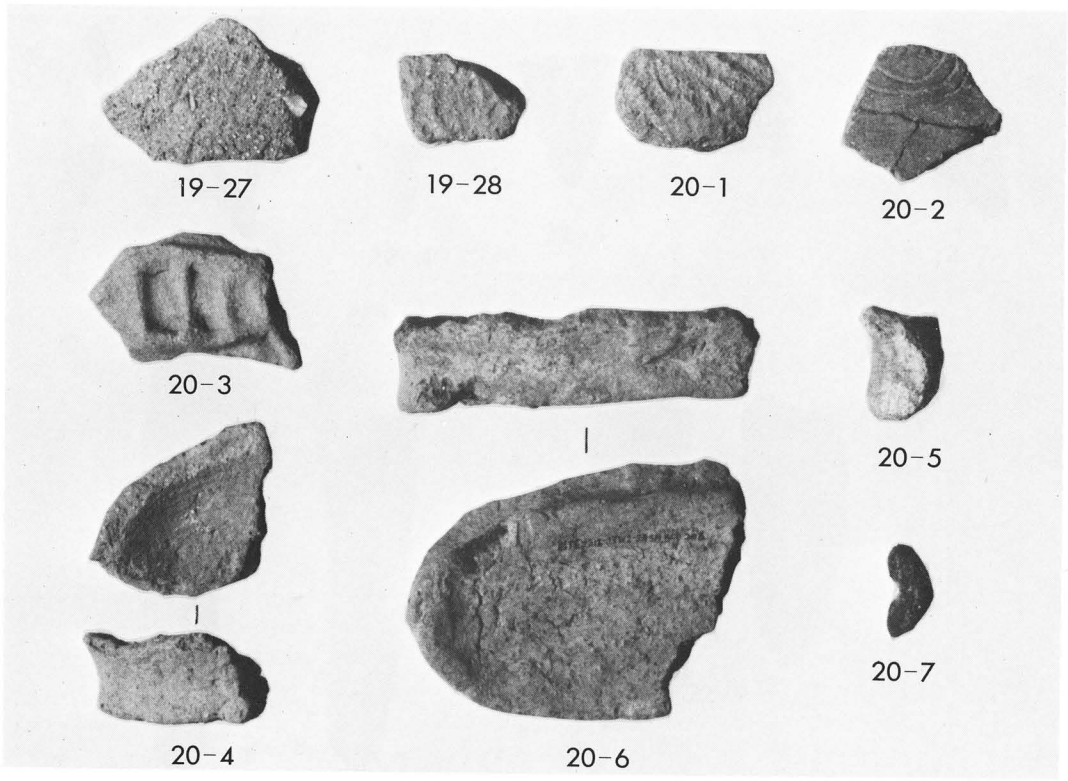
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土土器（1 : 2）



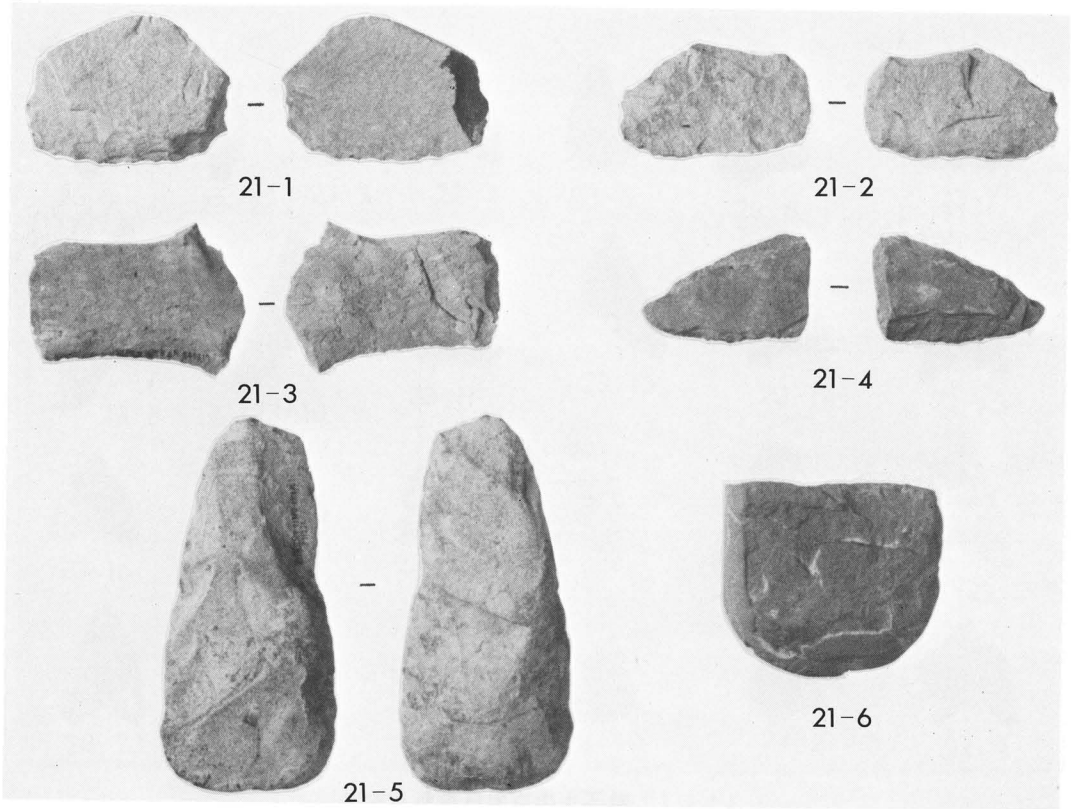
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土土器（1 : 2）



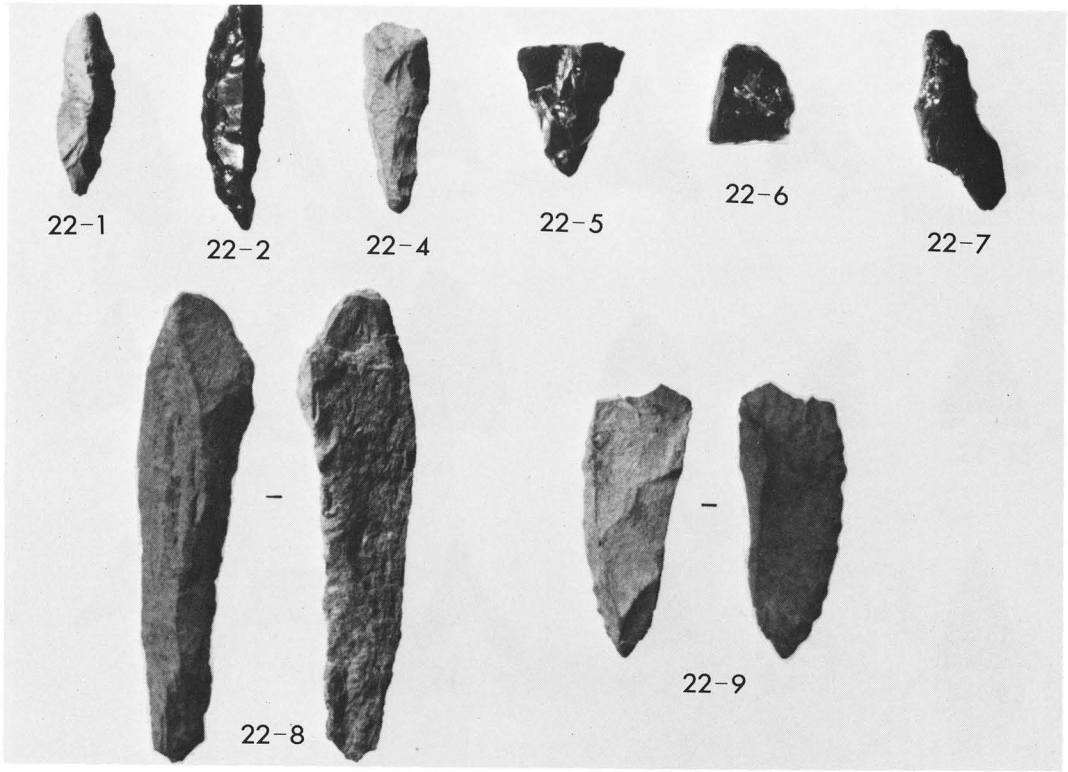
岩塚Ⅱ遺跡Ｂ地点出土土器（１：２）



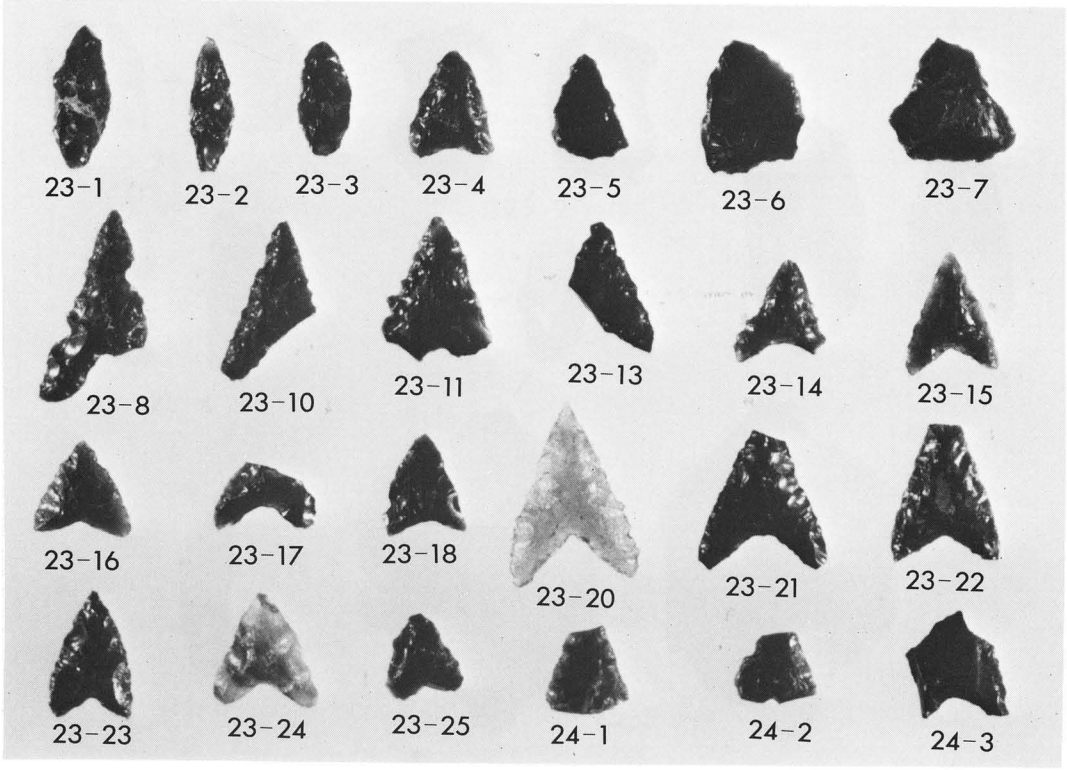
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土土器（1 ： 2）



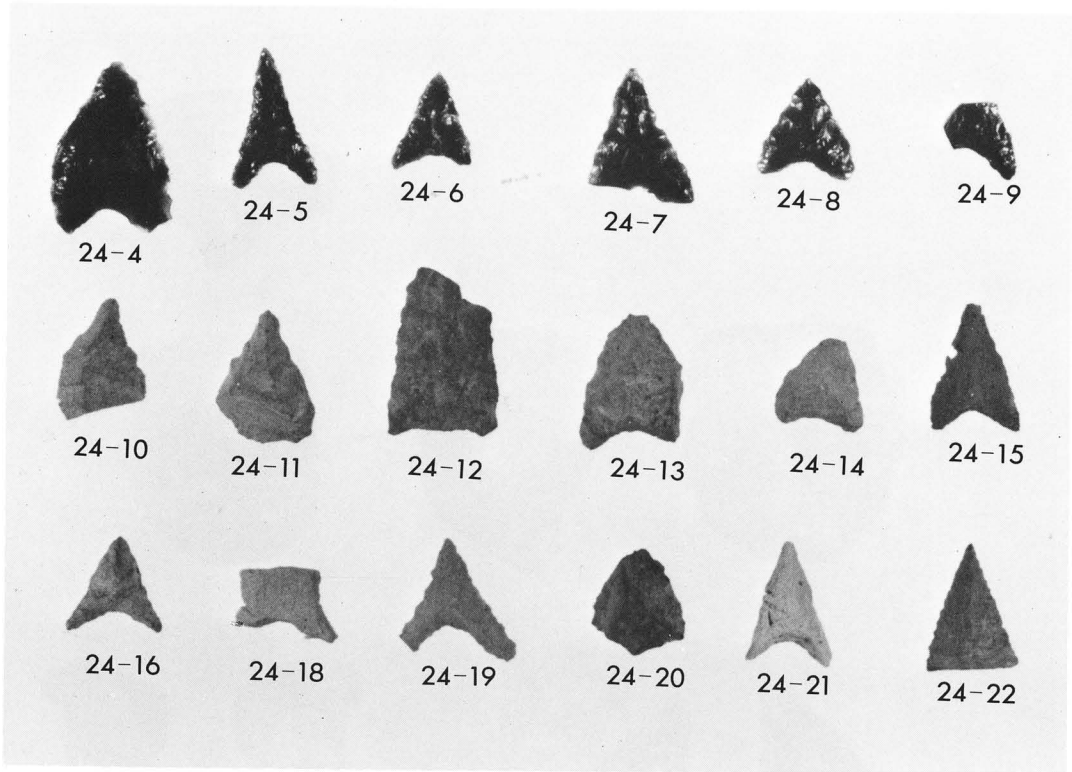
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土石器（1 ： 2）



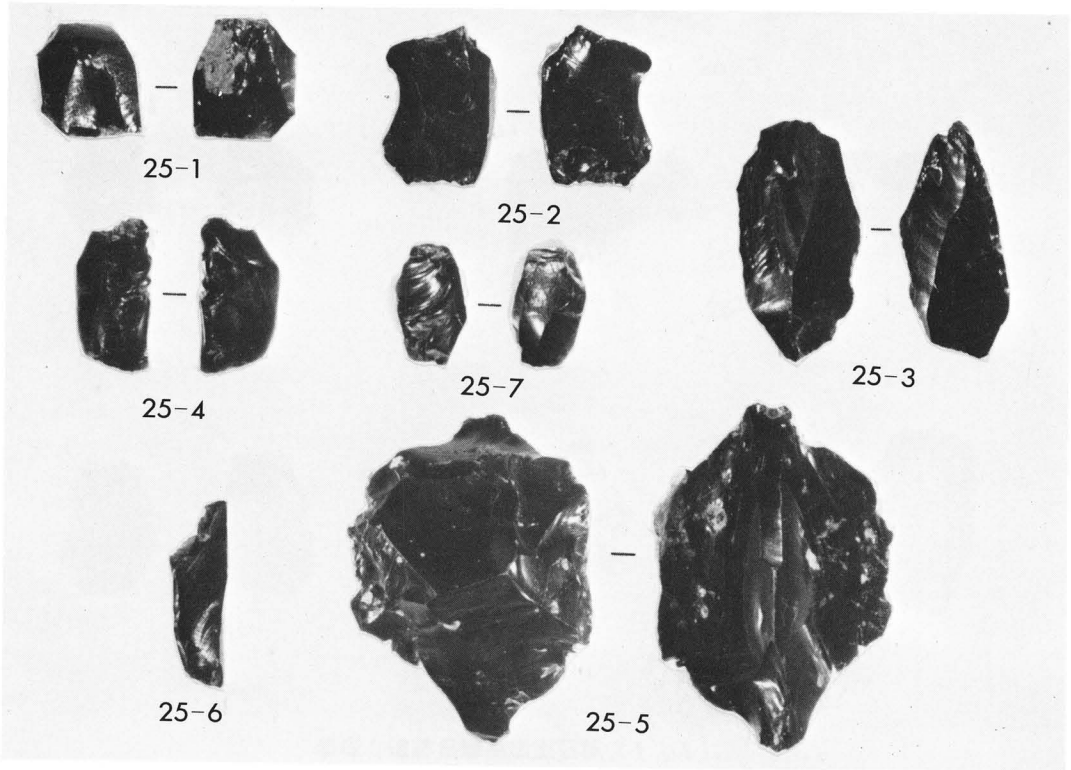
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土石器（1：1）



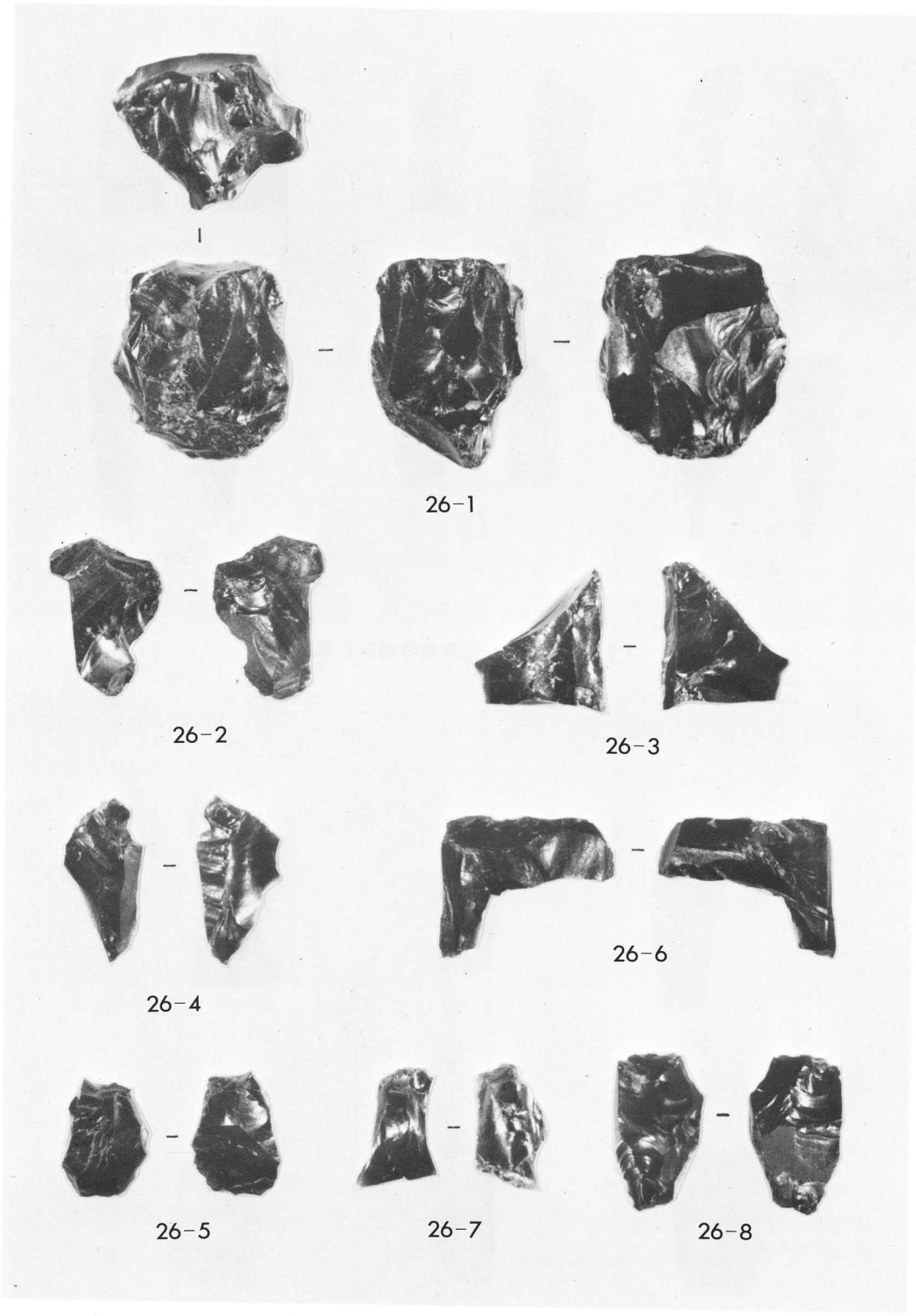
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土石鏃（1：1）



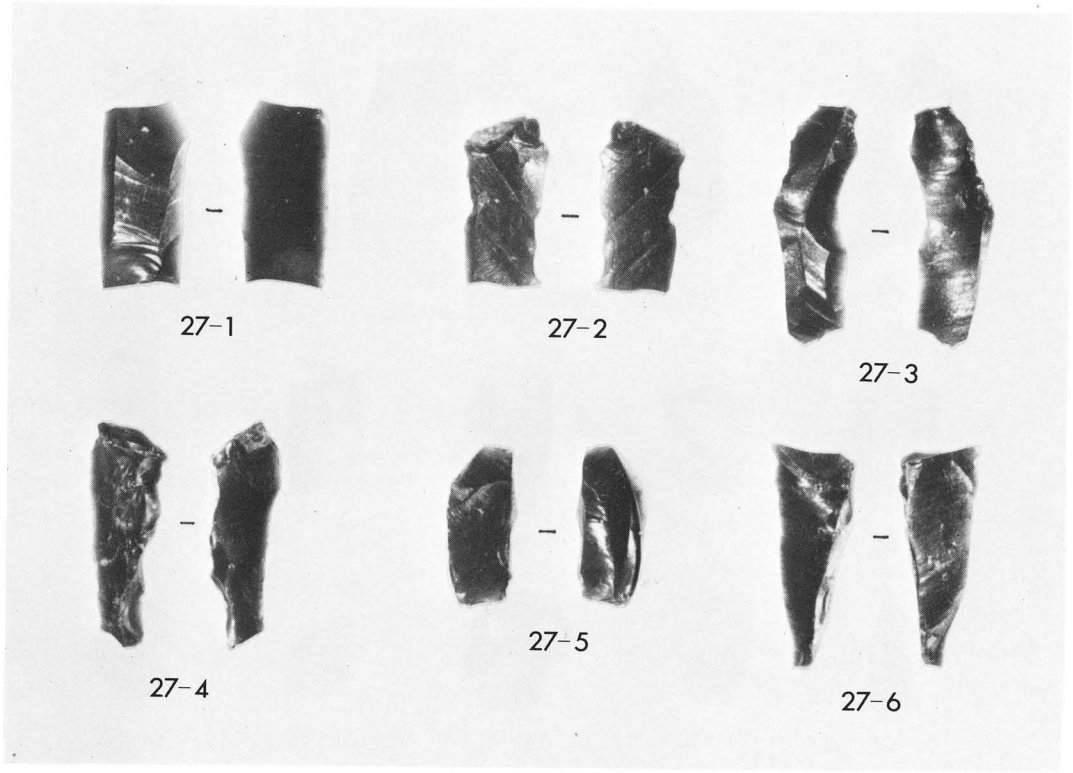
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土石鏃（1 ： 1）



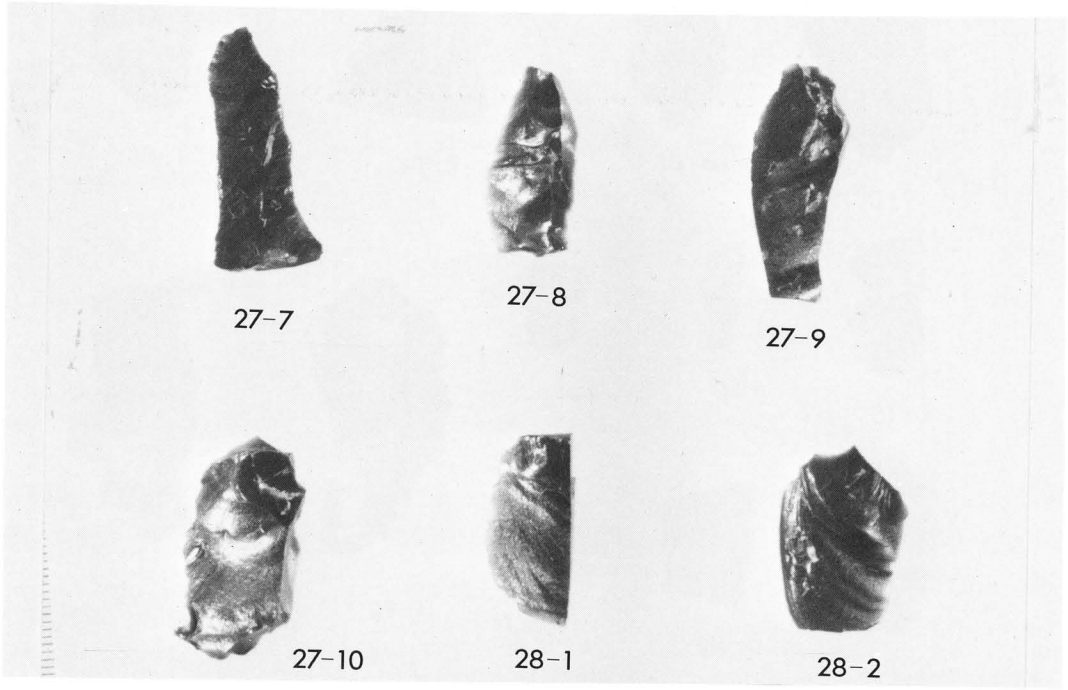
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土契形石器・石核（1 ： 1）



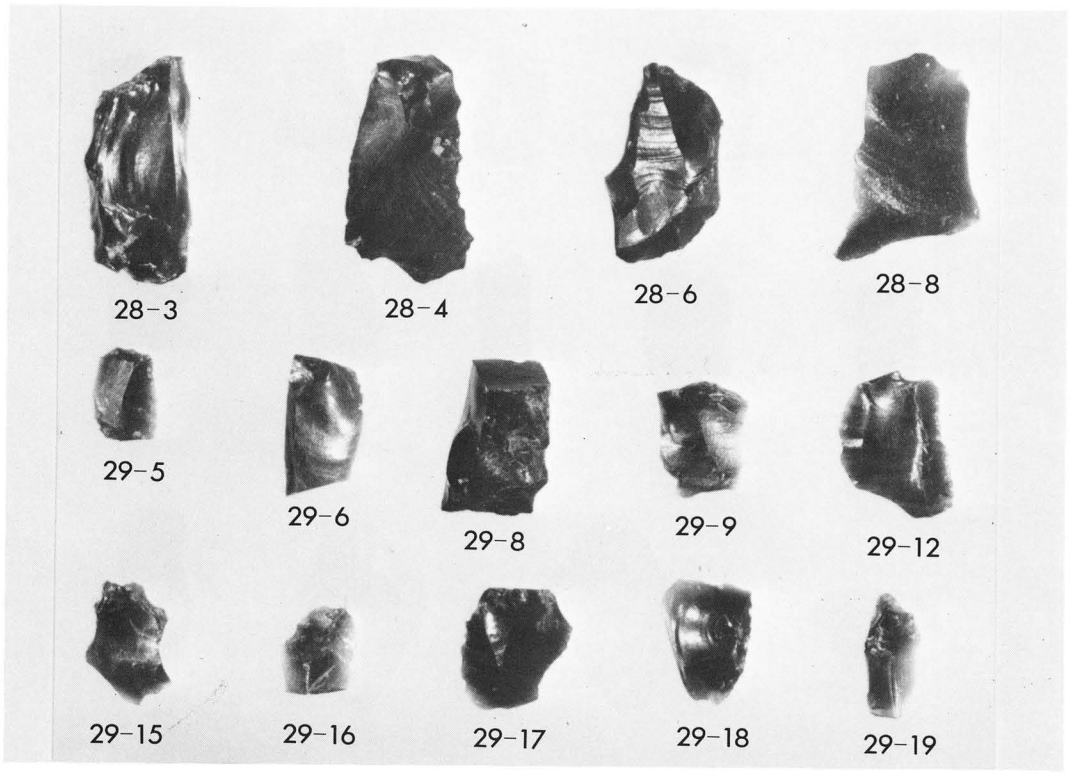
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土石核（1：1）



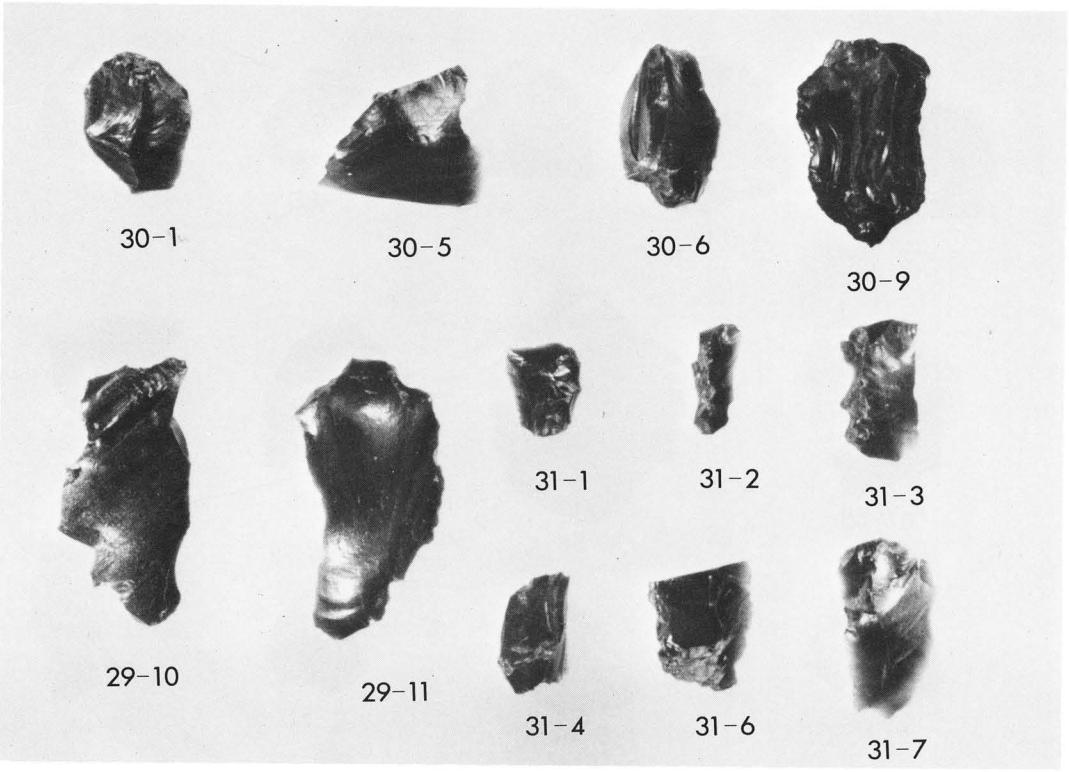
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土剥片（1：1）



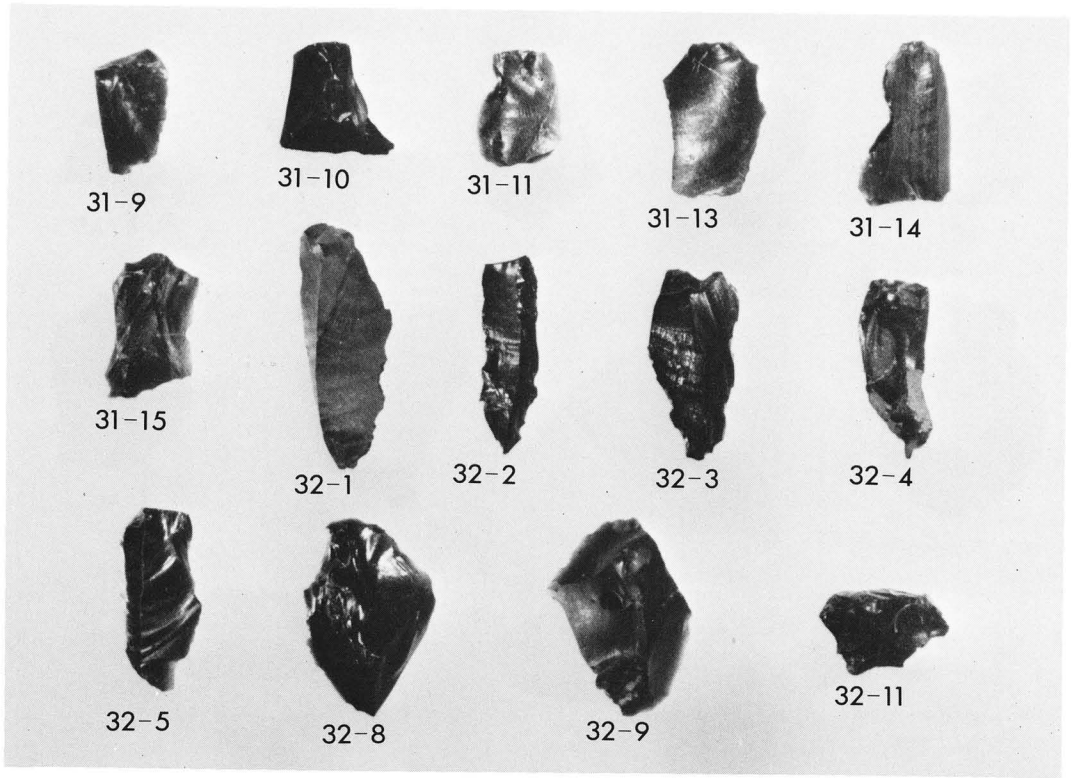
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土剥片（1：1）



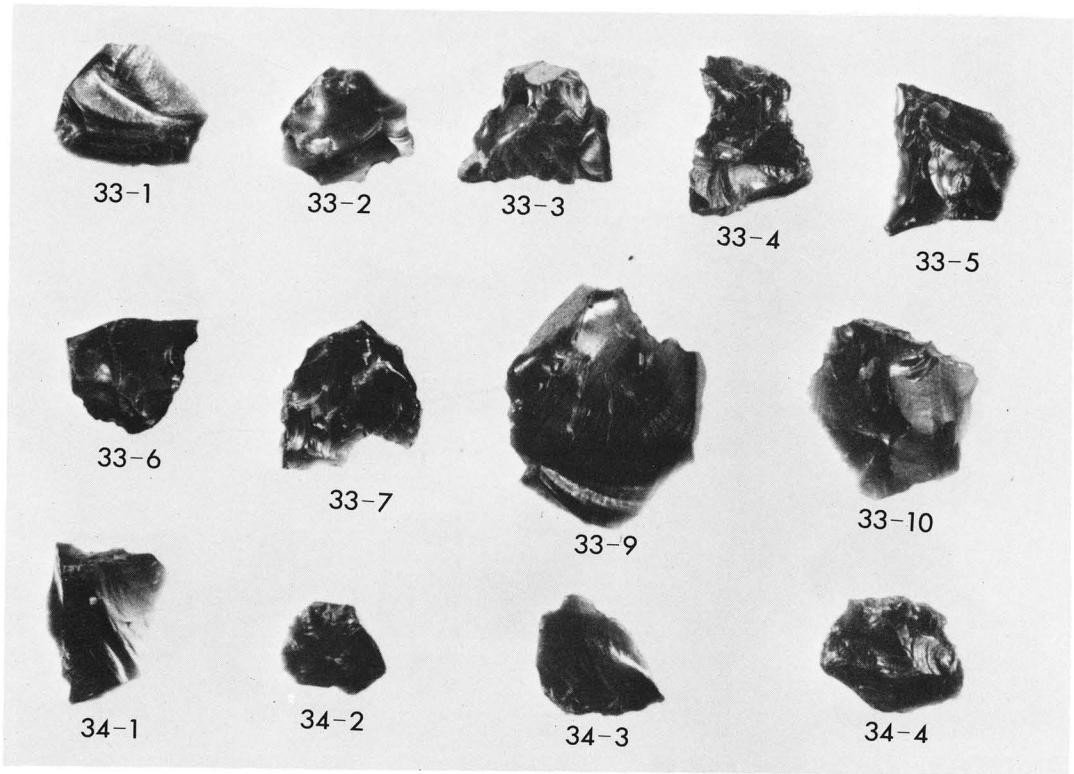
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土剥片（1：1）



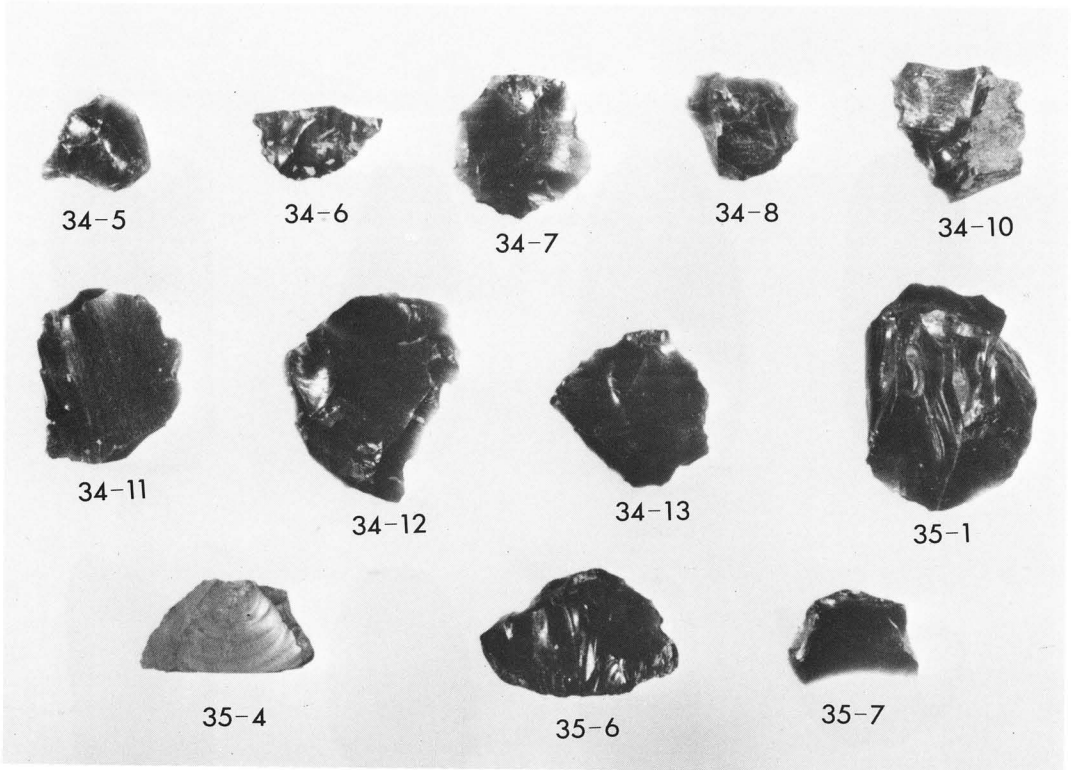
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土剥片（1：1）



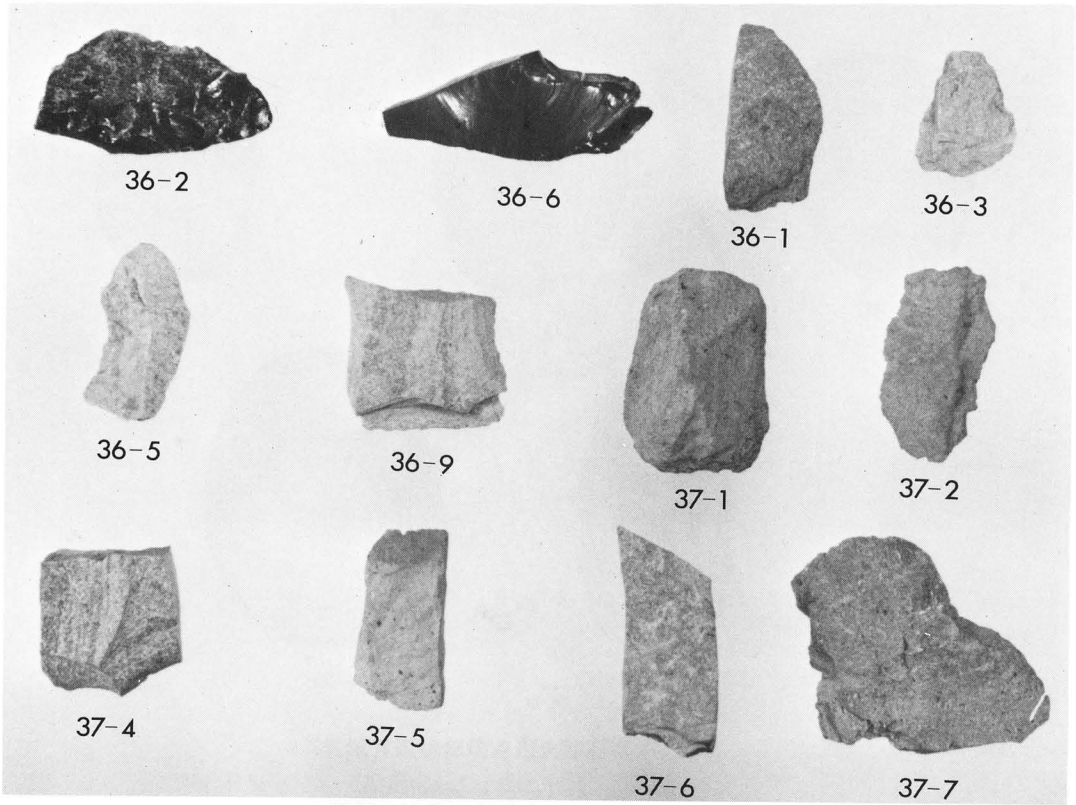
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土剥片（1：1）



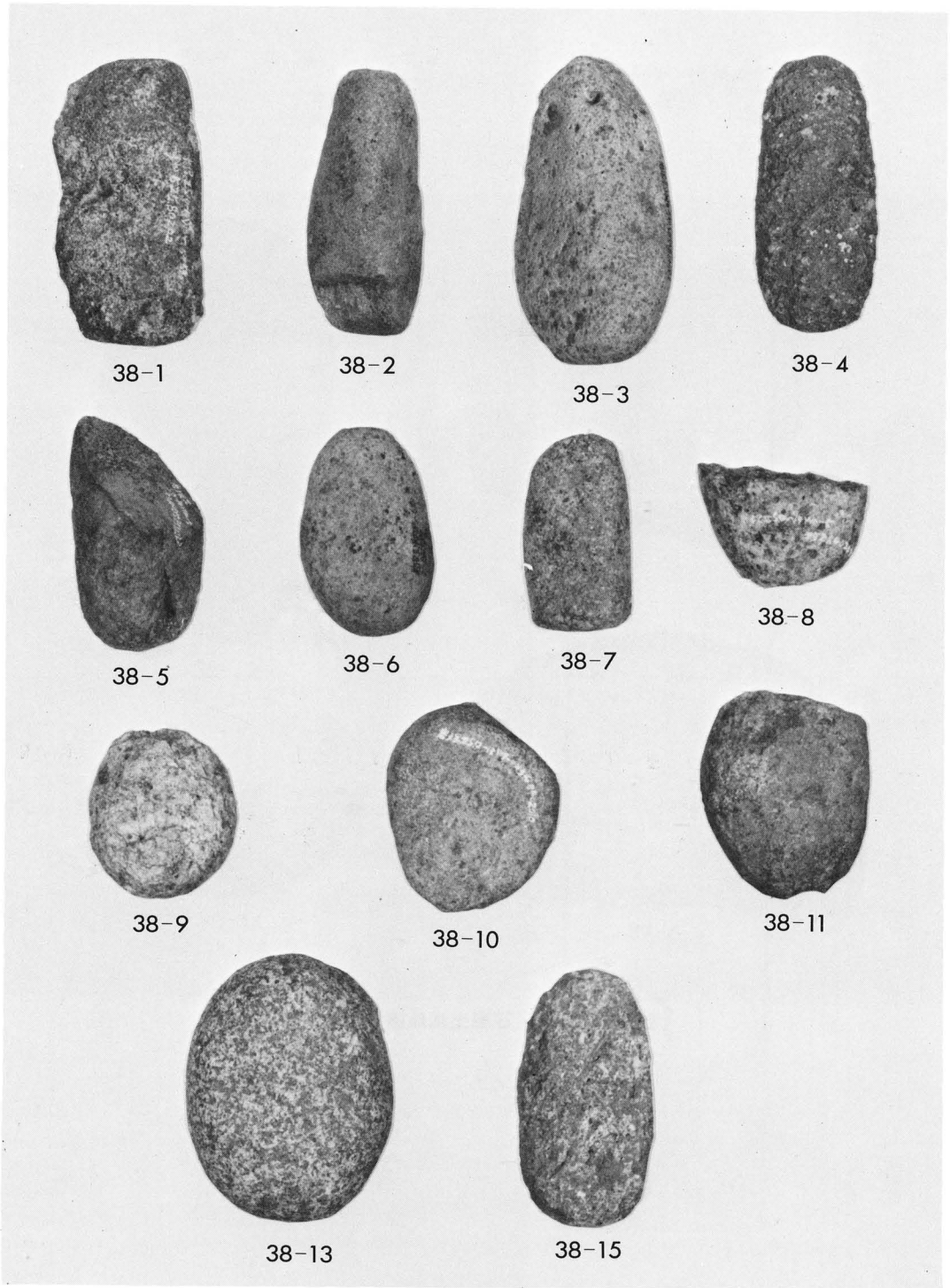
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土剥片（1：1）



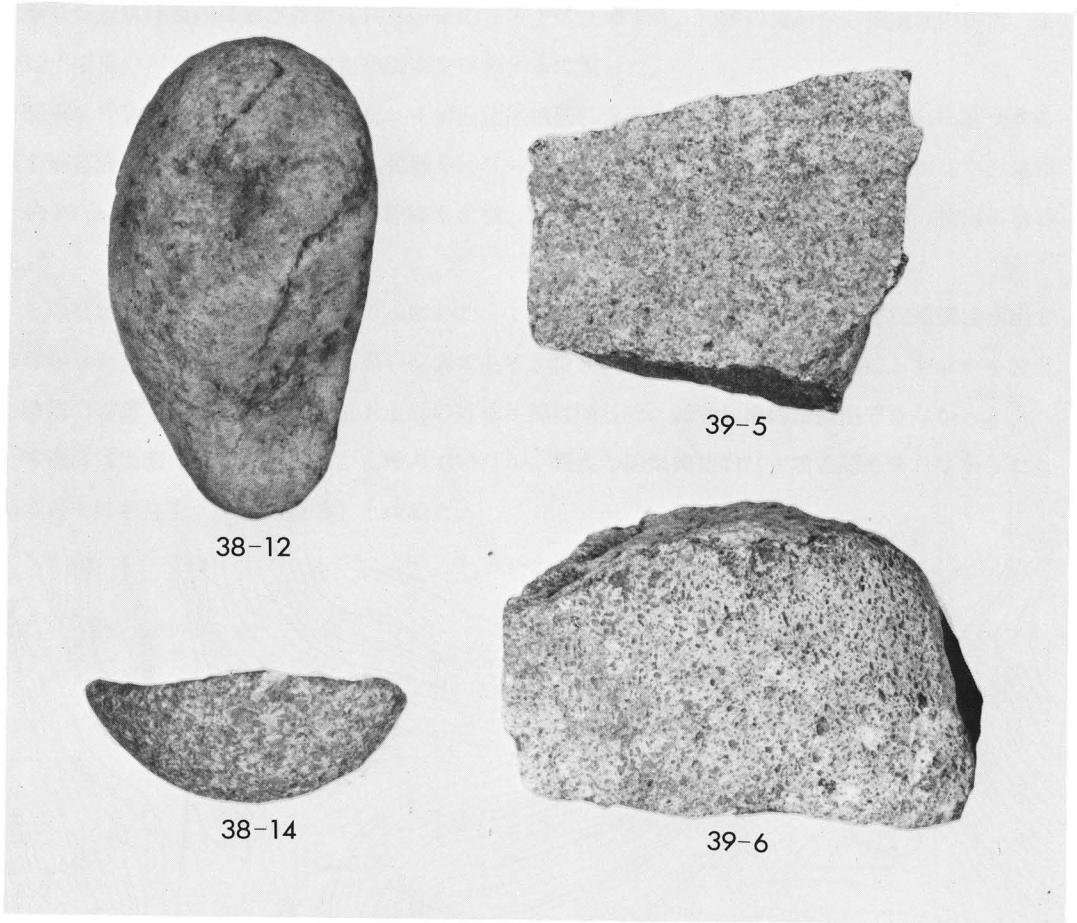
岩塚Ⅱ遺跡B地点出土剥片（1：1）



岩塚Ⅱ遺跡B地点出土剥片（1：1）



岩塚Ⅱ遺跡B地点出土叩石（1 ： 2）



岩塚Ⅱ遺跡B地点出土磨石・石皿（1：2）

Ⅳ　案床畑オイト谷遺跡

―那賀郡金城町今福―

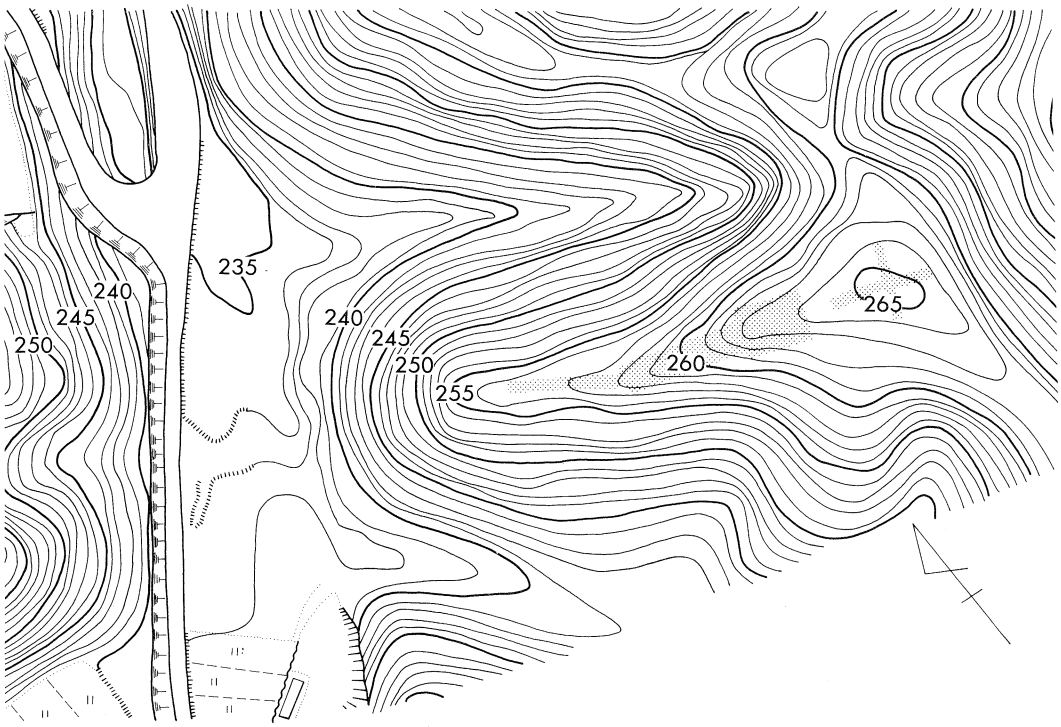
1 案床畑遺跡

案床畑遺跡は東西に伸びる標高約250 mの丘陵上に立地する。丘陵の地形から低墳丘の古墳、または土壙墓の存在が予想されたため調査を実施するに至った。

調査は丘陵頂部を中心に行なった。まず丘陵尾根筋に土層観察用の畦を設定し、それに直交する畦を適宜設け、土層を観察しながら発掘を行なった。丘陵頂部ではあまり土層の堆積がなく、地表下約30 cmで地山に達した。表土を除去した後、平坦面を中心に精査を行ない、遺構の検出に務めた。

その結果、丘陵中央で約40 × 30 cmにわたって焼土を検出したにとどまり、顕著な遺構は検出できなかった。さらに本丘陵の最も高い位置にある、墳丘状の高まりに「十」字形にトレンチを設定し遺構の確認を行なった。ここでも土層の堆積状況は同じで、顕著な遺構は検出できなかった。

本遺跡は当初「案床畑古墳群」と呼んでいたが、調査の結果典型的な古墳と認められなかったため本書では名称を「案床畑遺跡」と改めた。



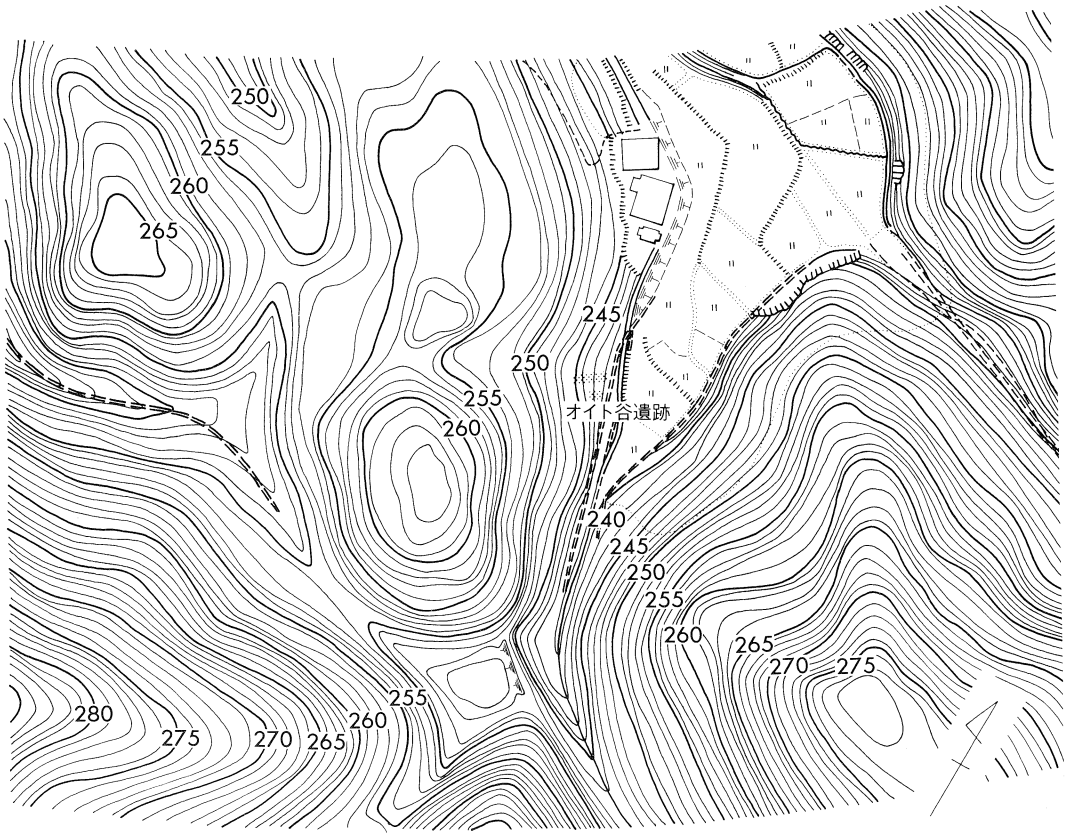
第1図　案床畑遺跡の位置と周辺の地形（1 : 2000）

2 オイト谷遺跡

オイト谷遺跡は東向きの急斜面に立地し、標高は約240 mである。その立地から遺構、遺物の存在が予想されたため調査を実施した。

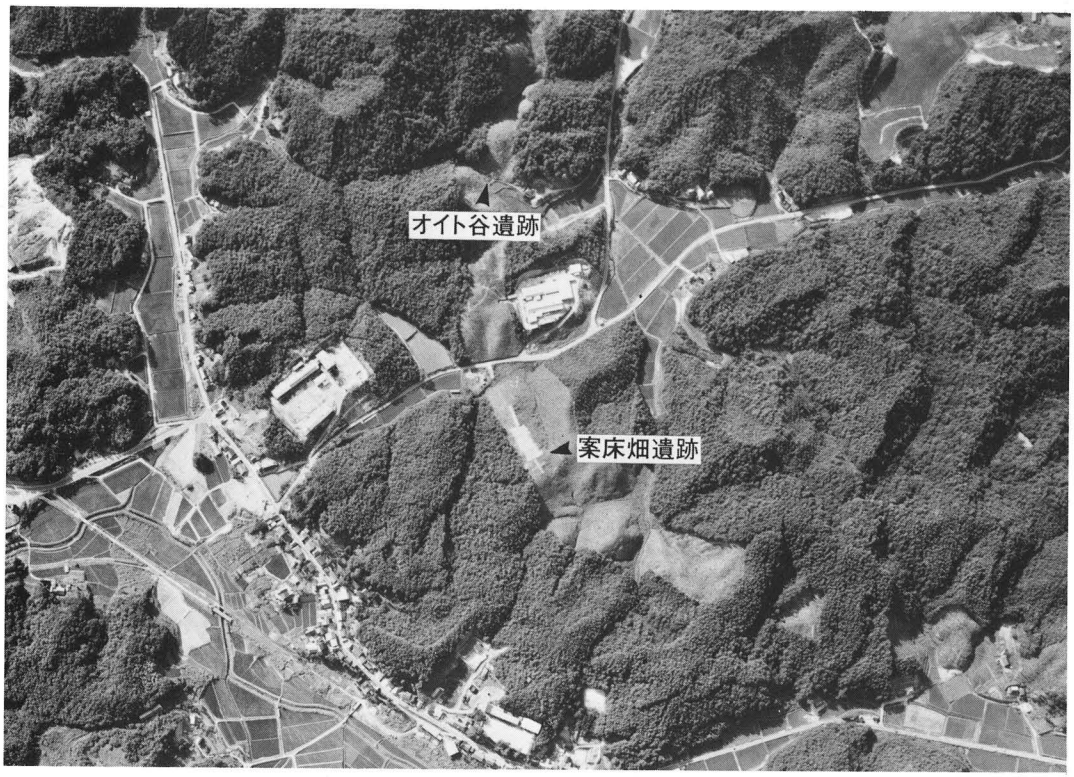
調査はまず等高線に直交するようにトレンチを設定し、土層を観察しながら遺構の確認に務めた。ここでは、地表下約20 cmで炭化物を多く含んだ黄色土が検出され、この層の上面から掘り込まれた土壙1が検出された。この土壙は平面形が不整だ円形、断面形がレンズ状を呈するもので、その規模は約1.5 × 1 m、深さ約0.3 mを測る。土壙内には炭火物を多く含む暗茶褐色土が堆積していた。

この土壙が掘り込まれている黄色土中には、炭化物が多く含まれていることから地山とは考えられなかった。そのためさらに掘り下げて地山確認に務めた。黄色土は約20 cm堆積しており、それを除去すると大小の石を含んだ赤色土が検出された。この層が地山と思われた。しかしながらこの面では明瞭な遺構は検出できず、黄色土に含まれた炭化物の性格を把握するには至らなかった。



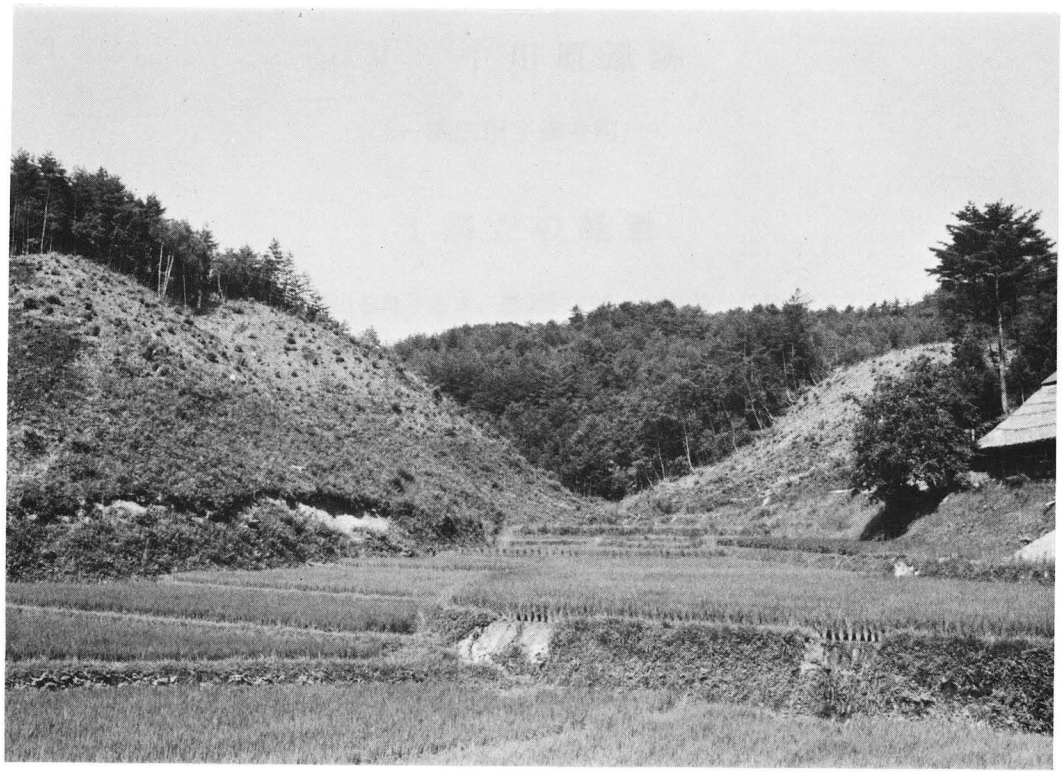
第2図　オイト谷遺跡の位置と周辺の地形（1 : 2000）

図版 1

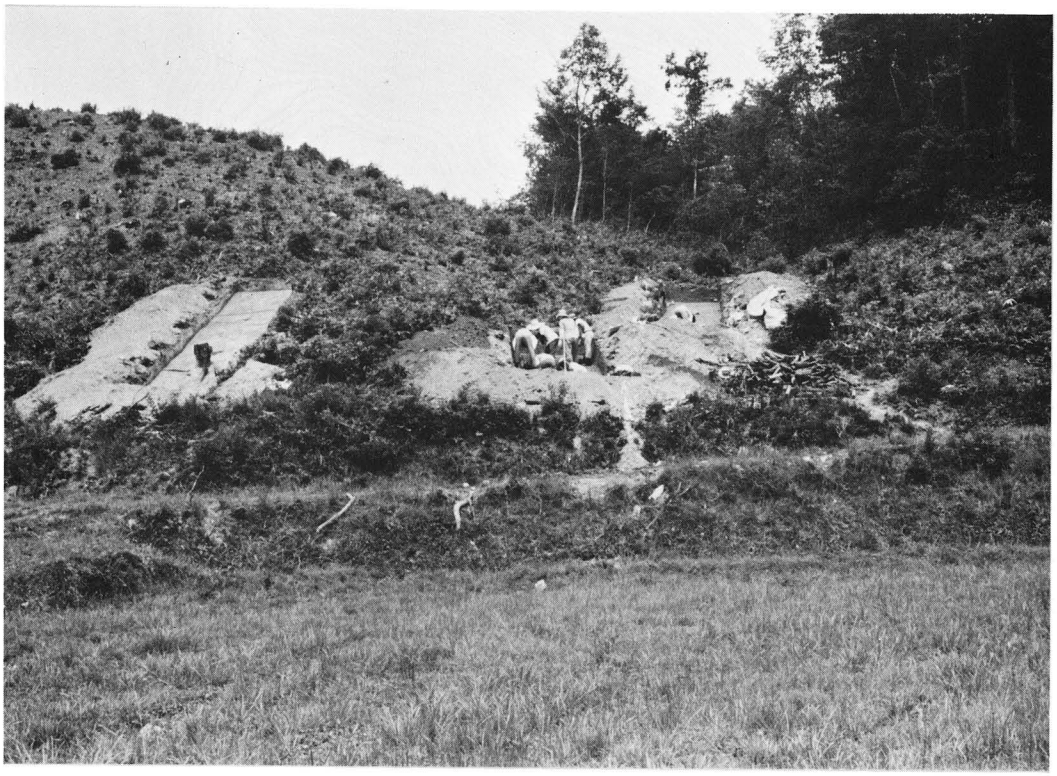


案床畑・オイト谷遺跡周辺の地形

案床畑遺跡近景



オイト谷遺跡近景



オイト谷遺跡調査風景

V　中川原遺跡

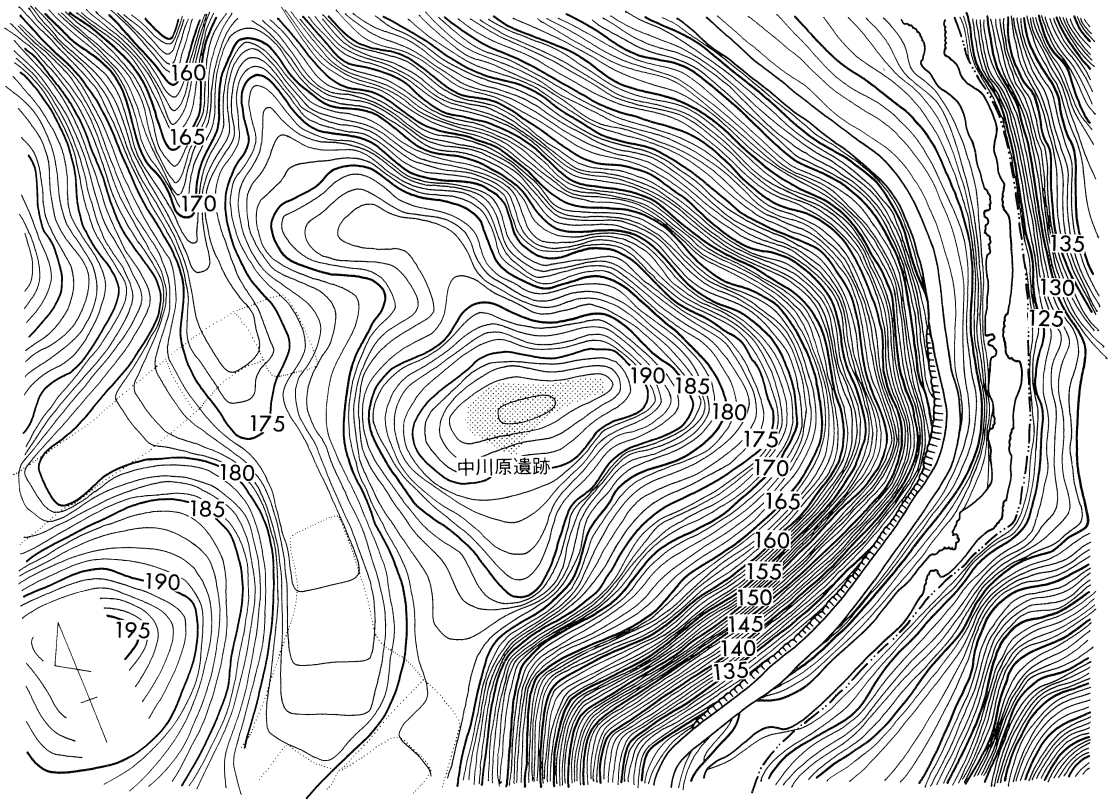
―浜田市宇津井町―

1 調査の経過

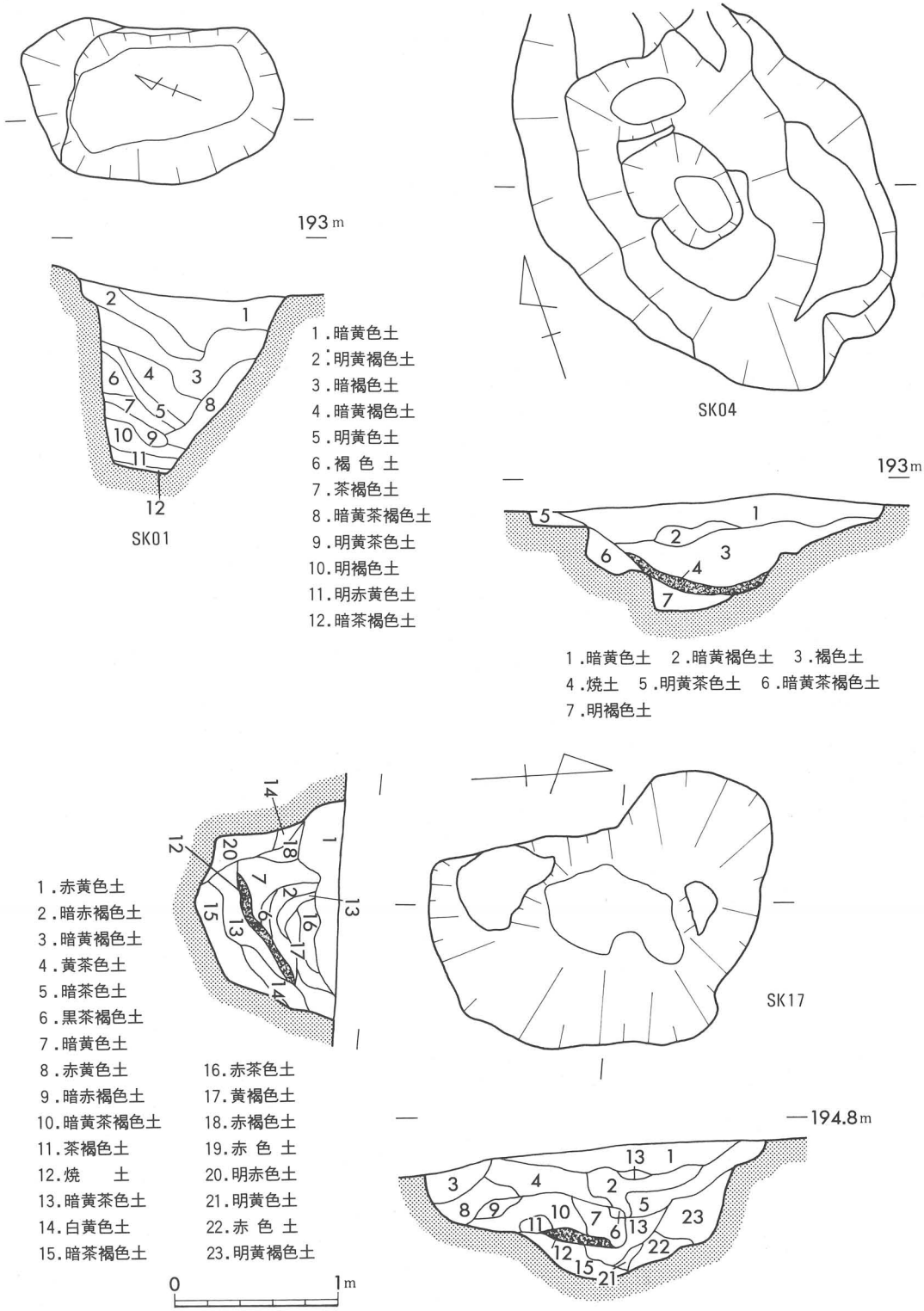
中川原遺跡は南東直下に下府川を見下ろす、標高約190ｍの急峻な丘陵上に立地する。丘陵の形状から古墳または土壙墓の存在が予想されたため発掘調査を行なった。

調査は昭和58年9月から開始し同年12月までの約3ケ月間を要した。調査はまず丘陵尾根筋に沿って土層観察用の畦と、それに直交する畦を適宜設けて行なった。表土を除去し精査を行なったところ、調査区の南東部で焼土塊、炭化物が集中して出土し何らかの遺構が存在することが予想された。調査の結果、丘陵頂部および斜面に土壙16、溝状遺構1が検出されたが、古墳、土壙墓を検出するに至らなかった。

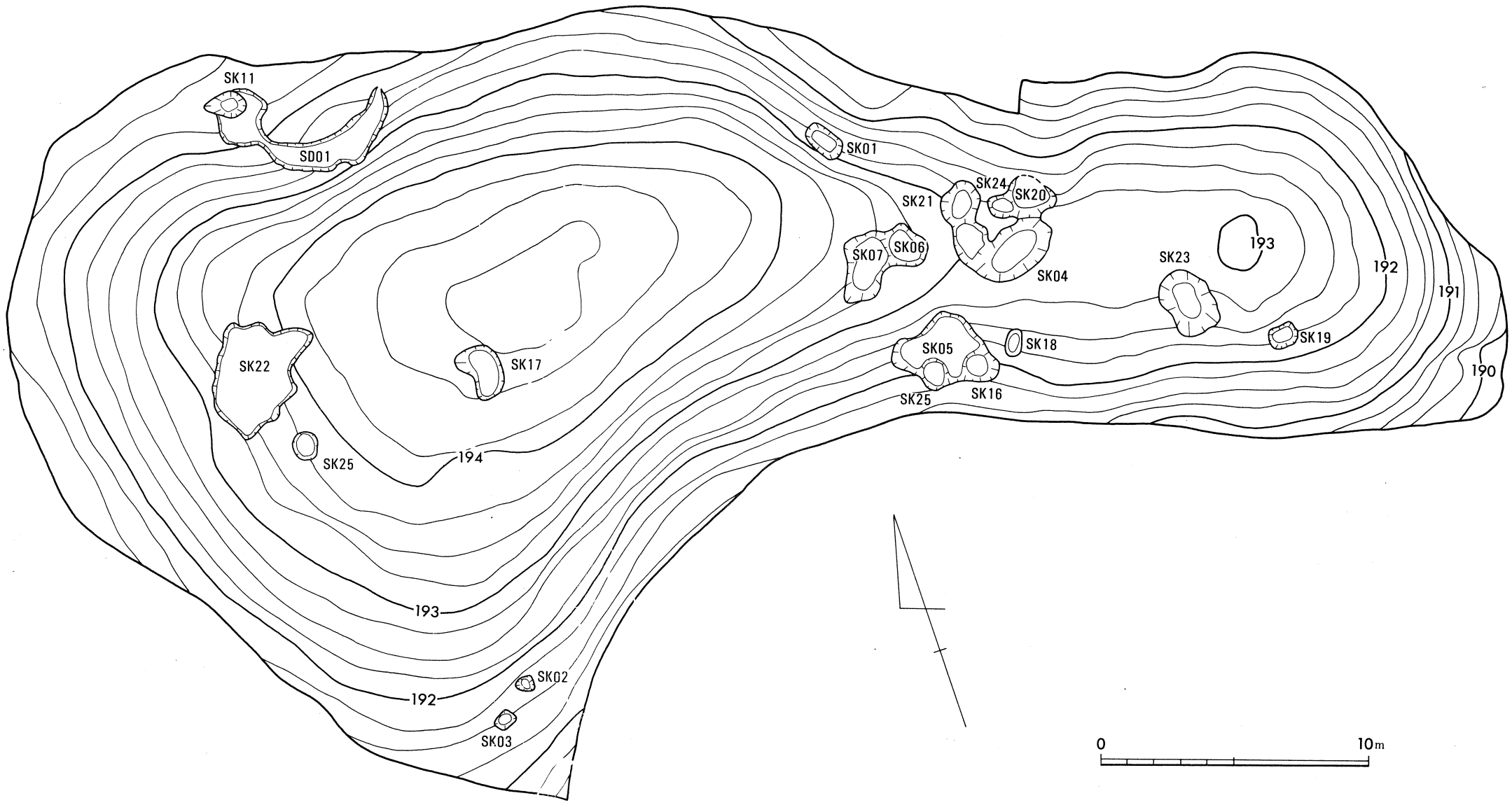
これらの土壙はＳＫ０１以外は平面形が不整円形で、底面が凹凸の著しいものが多く、埋葬などを行なった痕跡は認められなかった。ＳＫ０１は平面形長方形を呈し、壁も急角度に掘り込まれた



第1図　遺跡の位置と周辺の地形（1：2000）



第２図　中川原遺跡土壙実測図（１：40）



第３図　中川原遺跡遺構配置図（１：200）

比較的しっかりした土壙である。その他の土壙はＳＫ０４、１７、１８のように底面近くに焼土がレンズ状に堆積しているものが多く、土壙内で火を焚いたものと思われる。土層の堆積状況からみて、これらは自然堆積によって埋没したものと思われた。なお、上記以外の土壙は非常に浅いものが多く、その平面形や規模など不明なものがほとんどである。また、ＳＫ０６、０７などのように深さはかなりあるものの平面形や底面がいびつなものがあり、倒木痕の可能性のあるものもある。

中川原遺跡は、当初古墳を予想して調査を行なったが、調査の結果典型的な古墳とは認められなかった。そのため本書では遺跡名を「中川原遺跡」と改めることにした。

２検出遺構

ＳＫ０１（第２図）　調査区中央の丘陵北斜面に位置する不整長方形の土壙である。その規模は上縁で約1.5×0.95ｍ、底面で約1.1×0.45～0.6ｍ、深さ約1.3ｍである。地山の土質が軟弱であるため、上半は崩れて不整形であるが、下半は比較的整った長方形を呈し、原形をとどめていると思われる。底面は中央がやや凹んでいるもののほぼ水平で、壁面は約80度の傾斜に掘り込まれている。土層は、炭化物を多く含む暗褐色土と、黄色土が交互に堆積しており、人為的に埋められた可能性もある。また、第10～12層は底面と水平に堆積しているが、第１～９層は傾斜して堆積している。これは第10層の上に置かれたものが腐朽し、それを覆っていた土が陥ち込み、その後さらに第１層が堆積したと想像できる。

遺物が出土していないため、ＳＫ０１の時期は不明である。

ＳＫ０４（第２図）　丘陵頂部の、中央やや東よりに位置し、ＳＫ２０、２１、２４と重複しているが、相互の前後関係は不明である。平面形は不整だ円形で、その規模は約3.1×1.8ｍ、深さは最も深いところで約１ｍである。底面は擂鉢形で凹凸が著しい。土層は自然堆積の状況を呈しており、第６、７層の上に厚さ約５㎝の焼土層がレンズ状にみられる。土層からみるとこの土壙は第６、７層が堆積した（または埋めた）後に火が焚かれ、その後廃棄され第１～４層が堆積したと想像できる。

遺物が出土していないため、ＳＫ０４の時期は不明である。

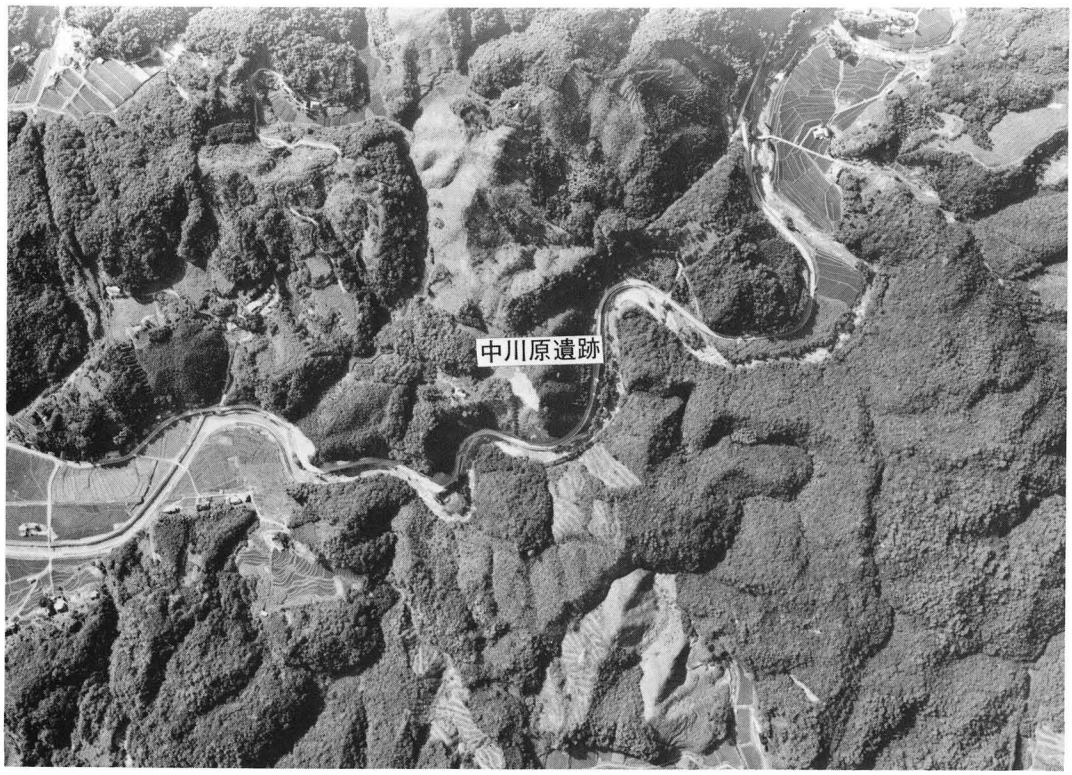
ＳＫ１７（第２図）　丘陵頂部の最も高いところに位置する。平面形は不整だ円形で、その規模は約2.2×1.3ｍ、深さは最も深いところで約0.8ｍである。底面は擂鉢形で凹凸が著しい。土層はＳＫ０４とほぼ同様な堆積状況で、第14～18層の上に約５㎝の焼土層がレンズ状に堆積している。

遺物が出土していないため、ＳＫ１７の時期は不明である。

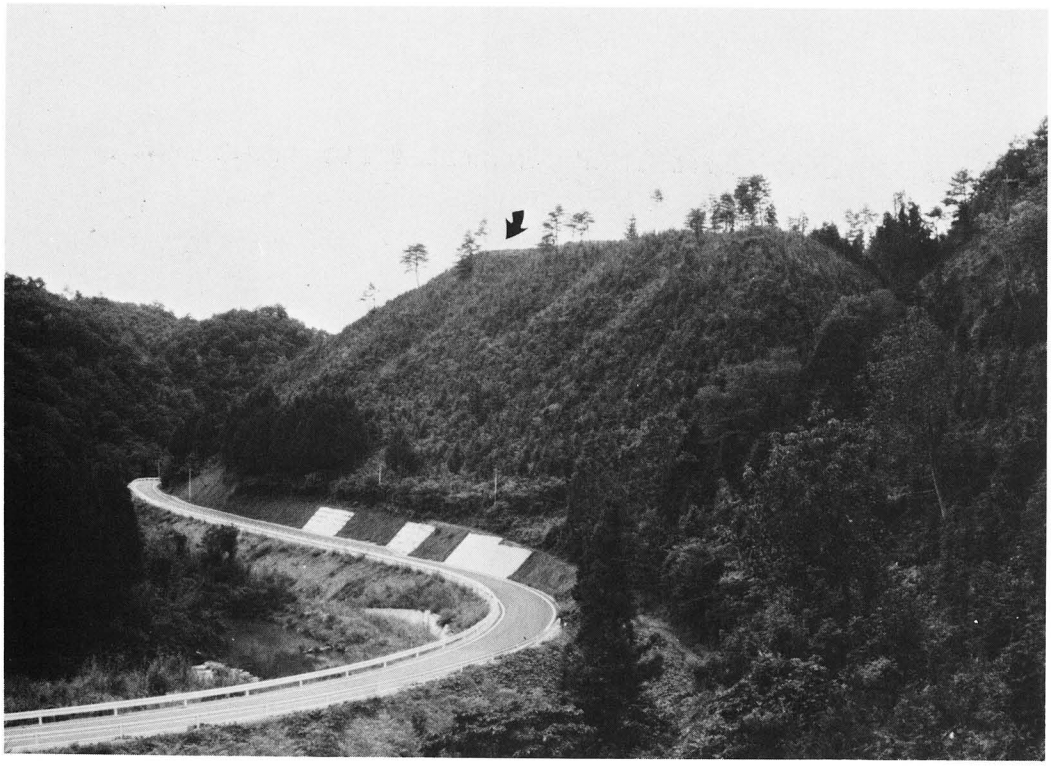
３小　　結

中川原遺跡では土壙19、溝状遺構１が検出された。いずれも遺物が出土していないため時期を決定することはできなかった。

ＳＫ０４、１７はともに底面近くに焼土層がみられる土壙であった。本稿では紹介しなかったがこのほかにも底面に焼土層がみられる土壙14が検出された。これらは土壙内で火が焚かれたことを示しており、換言すれば火を焚くために穿たれた土壙であると考えられる。しかしながら、このような土壙は県内では類例がなく、その性格はまったく不明といわざるをえない。

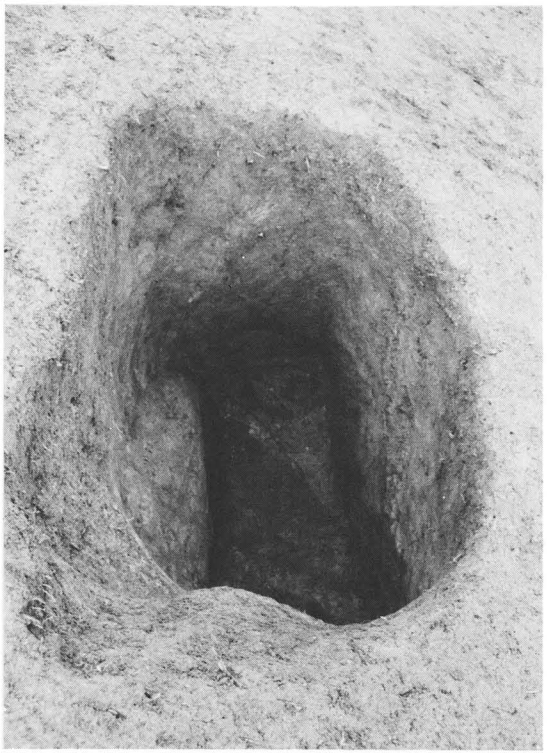


中川原遺跡周辺の地形



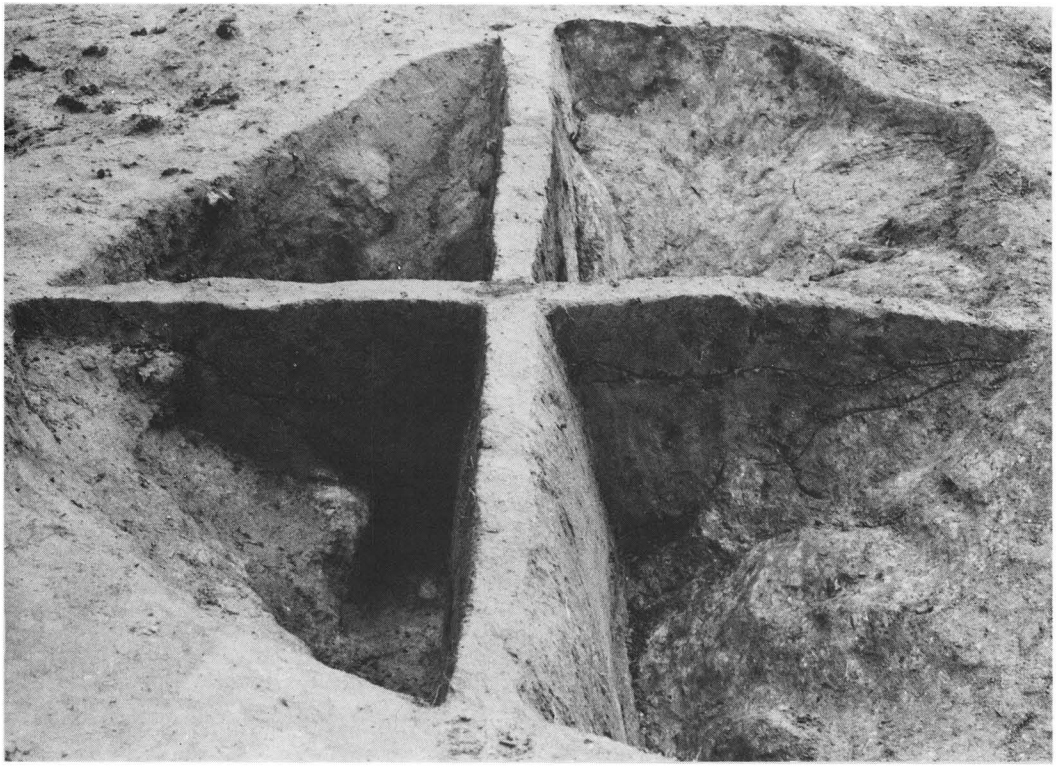
中川原遺跡近景（北から）

中川原遺跡西部全景



中川原遺跡 SK01

中川原遺跡 SK04



中川原遺跡 SK04 土層

Ⅵ　浜伊場遺跡

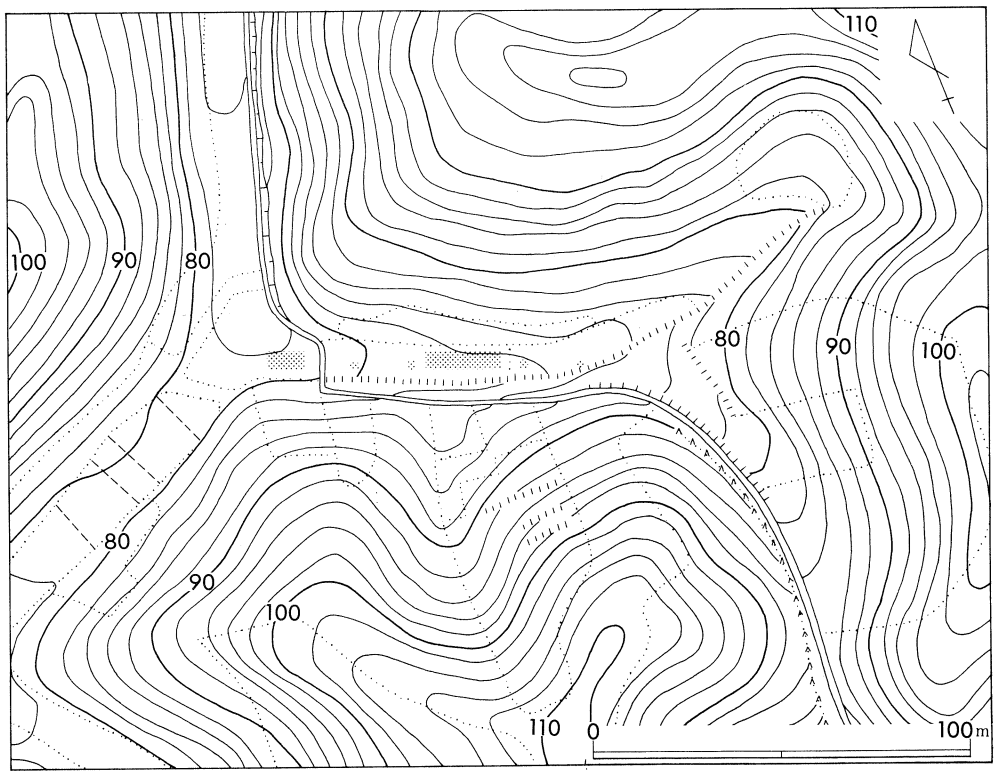
―浜田市長沢町―

調査の経過と遺跡の概要　第３トレンチでは地表下約40㎝で地山と思われる黄茶色土層が検出された。この層は南東から北西に向って傾斜しており、旧地形は現在ほど平坦ではないようである。地山の確認のためにさらに掘り下げたところ、地表下約90㎝で人頭大の礫を多く含んだ層が検出されたが、黄茶色土、礫層中からは遺物が出土しなかったことから黄茶色土以下の層は地山であることを確認した。なお、このトレンチでは溝状の窪みがみられたが、遺構ではないように思われた。他のトレンチも　第３トレンチと同様の堆積をしており、各トレンチとも地表下約10㎝～160㎝で地山に達した。

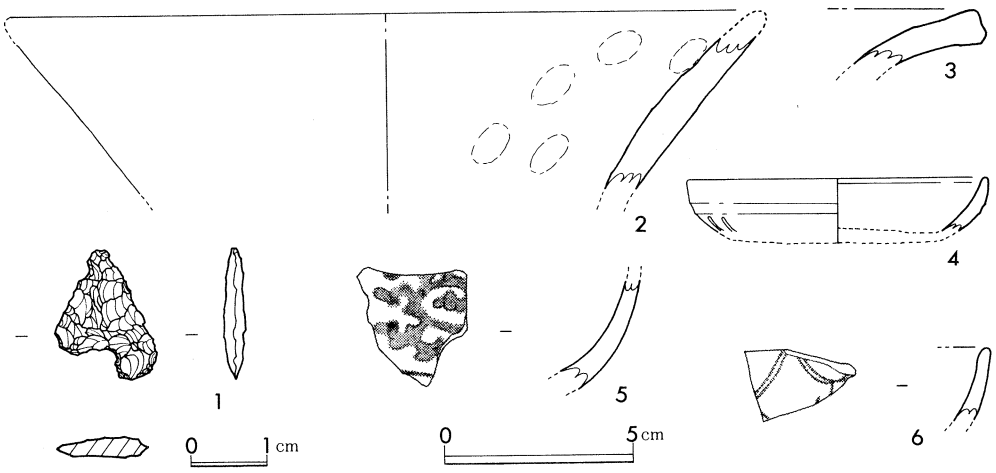
調査の結果、本遺跡では住居跡などの遺構は検出できず、表土内から約９点の遺物が出土したにとどまった。

出土遺物（第２図）　本遺跡からは計９個の遺物が出土した。そのうちわけは石鏃１、土師器１、土師質土器２、須恵器１、陶磁器４である。

石鏃（第２図１）は凹基式のもので黒曜石製である。脚部の一方が欠損する。長さ1.15㎝、厚さ

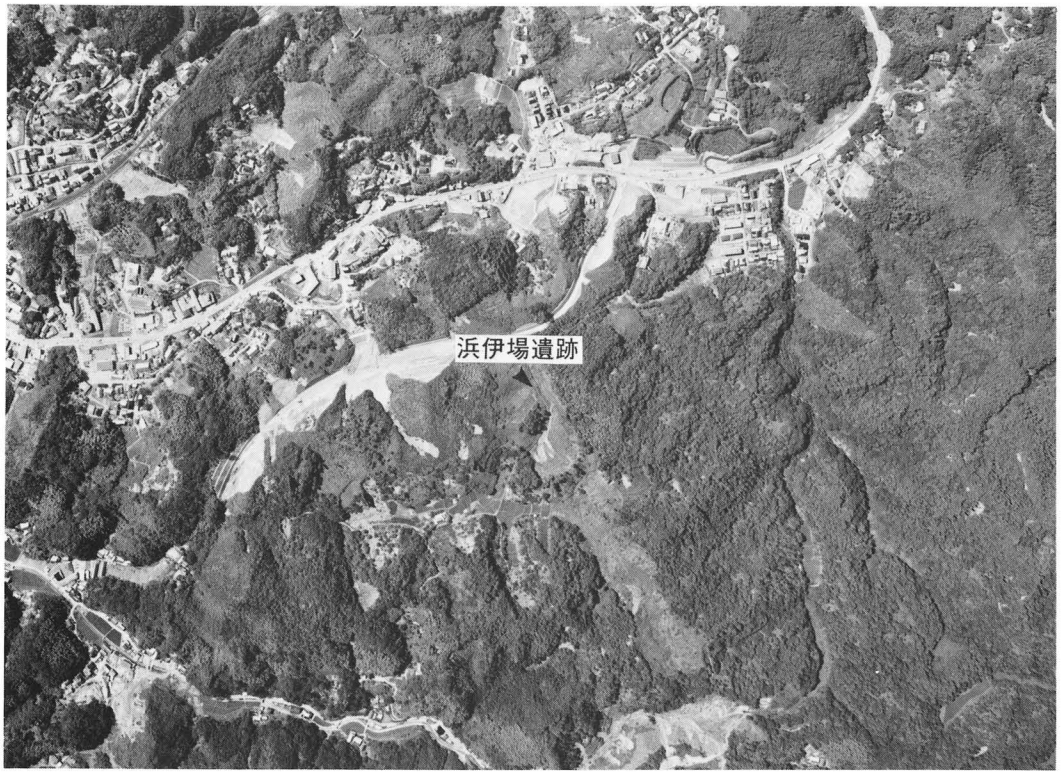


第１図　遺跡の位置と周辺の地形



第２図　浜伊場遺跡出土遺物実測図

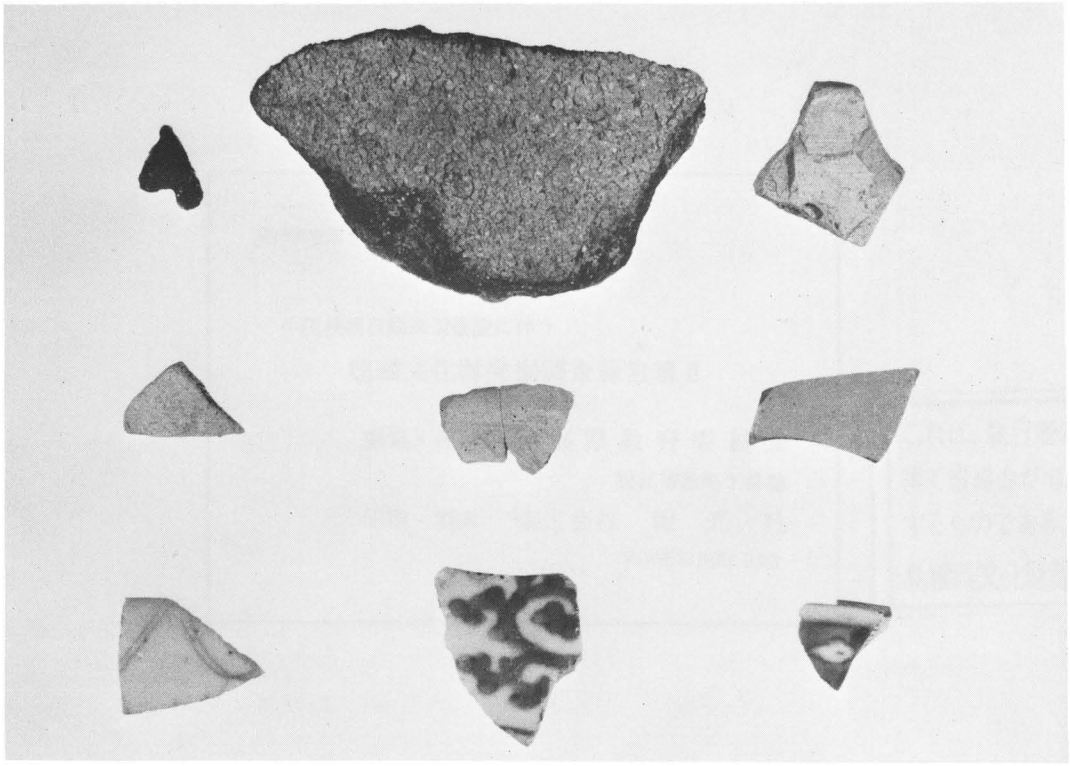
0.25 ㎝を測る。土師器（同図２）は「く」の字状に開く土師器の口縁部と思われる。調整は内面がヨコナデ調整が施され、指頭圧痕が残る。外面は摩滅が著しく調整不明である。胎土はやや粗く、焼成は良好で、内面は淡茶色、外面は黄褐色を呈す。土師質土器（同図４）は口縁部の破片である。器壁の厚さは一定しない。外面はヘラ削り、内面はヨコナデ調整が施される。胎土は緻密で焼成は良好、黄赤色を呈す。復元口径８㎝を測る。同図３は口縁部であるが小片のため器種は不明である。黄灰色を呈す。陶磁器（同図５）は碗類の破片と思われる磁器で、外面は呉須で蛸唐草文が描かれており、内面は無地である。やや厚手である。同図６は皿か碗の口縁部で２条の曲線によって文様が描かれている。



浜伊場遺跡周辺の地形

浜伊場遺跡近景（発掘前）

浜伊場遺跡第１トレンチ



浜伊場遺跡出土遺物

昭和60年３月21日　発行

中国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

編集・発行　島根県教育委員会
松江市殿町１番地
印刷・製本　株式会社　報光社
平田市平田町993